

翻 訳

## 1949 年以後の朱光潜

—自由主義からマルクス主義美学へ—

单 世 聯 著  
桑 島 由美子 訳

### 訳者解題

建国後 17 年（1949 年から 1966 年、中華人民共和国の成立から文革まで）の時期については文革終結後、今日に至るも、研究領域としては依然「禁区」と見なされ公に禁令こそ出ないが様々な制約を加えられている。しかし中国知識人の精神史において、この間の文学・思想状況を永久に等閑に付すわけにはいかない。朱光潜は京派を代表する文芸理論家として独自の審美的追求を行い、30 年代文芸を彩った美学者として夙に著名である。先行研究はきわめて少ないが最近の論稿としては葉朗（北京大学）による「朱光潜と李沢厚の美学論争」（『美学芸術学研究』16号東京大学1997年）などがある。

50年代以降の複雑な政治状況を背景として、彼がいかにして自由主義とマルクス主義の融合を企図していたかについて論じたのが本稿である。著者の单世聯氏は1962年江蘇省生まれで、1986年中山大学大学院を修了、現在社会科学院研究員。思想、美学、文化理論研究を専攻。主要著作に『反抗現代性：從独国到中国』（広東教育出版社1998年）『現代性与文化工業』（広東人民出版社2000年）『記憶的力量：紅樓夢与中国心靈』（広東人民出版社2003年）がある。

朱光潜の理論的営為、個人的な心情から政治メカニズムのレベルまで言及した本稿は、歴史の空白に挑む中国の若手研究者の気鋭を伺わせ、また論争に関わる一次資料を十分に精査し思想上の論争を掘り下げること成功している。建国後も大陸にとどまり、西洋美学の碩学として北京大学に奉職し、建国後も弛まず学術探求に専心していた朱光潜の生涯を顧み、その今日的な意義について認識を深めるべきだろう。日本の学会においても丸山昇『文化大革命に到る道』（岩波書店2002年）木山英雄『人は歌い人は哭く大旗の前—漢詩の毛沢東時代—』（岩波書店2005年）をはじめ、宇野木洋氏の一連の研究など17年時期へ

の洞察は深まりつつある。プレ文革における文化界の人間模様・政治状況や、職業作家でない知識人によって綴られた夥しい数の獄中詩などによって、文学史の空白が徐々に埋められていく。丸山昇氏の言うようにポスト文革の時期においても建国後17年は大きな影を投げかけている。「六・四」や「南巡講話」にも貫徹するその『原則』を支える論理・思考方法や構造は現代に生きる知識人にも今なお大きな桎梏であり続けている。

私個人は、昨年大学院の講義を通じて、一人の交換留学生を通して、17年文学の現況について知る機会があった。彼の指導教官が17年時期の文学研究の第一人者、白燁教授であったためである。全く文革を知らない世代に、この時期の研究が引き継がれていることに時の流れを感じると同時に、日本の若手世代の間では文学研究の領域における思想的探求が著しく後退していることに思い至らざるを得なかった。敢えてこの論文の翻訳を思い立った背景には以上のような経緯がある。

---

1949年、天地は覆った。卓然として名を成していた学者にしてみれば、もしこの新体制下で学術や文化に対し発言権を維持しようとするならマルクス主義を受容せざるを得ない運命にあった。しかし政治思想としてマルクス主義を受容する前提のもと、多くの学科、学者には、「科学」としてのマルクス主義についての理解と解釈に大きな差異が認められ、そこに構築された学術境地の様相も各々趣を異にしていた。本稿では朱光潜先生のマルクス主義への道を遡る。

## 一、全面批判 なぜ朱光潜なのか？

1948年3月、文芸方面における共産党の指導者が編集した『大衆文芸』が香港で世に出た。綱領的な文章として最初に公表されたのは邵荃麟の筆による『当面の文芸運動についての意見』であった。彼ははっきり宣言していた。「我々は今日の文芸思想上の混乱状態は、主に個人主義の意識と思想が群衆の意識と集団主義の思想に置き換わったことによる」と考える。」徹底して「反動文芸思想」を暴露、攻撃し、「アメリカ帝国主義の中国に対する直接的文化侵略」を除去する他に、

次に、これも更に重要であるが、地主資産階級の御用文芸である。この中心にいるのは朱光潜、梁実秋、沈從文らの「芸術のための芸術論」である。…<sup>(1)</sup>

朱、梁、沈はみな文芸方面の自由主義の代表的人物である。40年代中期、自由主義およびその政治上の主な代表「民盟」と共産党とは緊密に協力しており、その共闘による国

国民党との「民主をめぐる争い」は政治的にきわめて活発な時期があった。両党の覇権争いが戦場に場を転じてから中間派の利用価値も次第に失われた。1947年10月、すでに守勢に転じていた国民党は民盟を非合法団体と宣告した。ほとんど同時期、反撃に転じた共産党もある文書の中で指摘している。「蒋介石反動集団が打倒されたならば、我々の基本的な攻撃方向は自由資産階級とりわけその右翼を孤立させなければならない。…自由資産階級の希望する欧米式の旧民主は、今日の世界では永遠に過去のものである。およそ共産党との協力、共産党の指導を受け入れない全ての人々は、必ずや大地主、大資産階級専政を支持するであろう。」<sup>(2)</sup> 1948年革命の勝利を目前として、自由主義に対する批判は激しさを強めた。<sup>(3)</sup> 1949年3月、毛沢東はまた「さらば、スチュアート」等の文で運動を温存した。『大衆文芸叢刊』で朱光潜らに加えた批判は、まさに政治的肅正の一環だった。

自由主義と美学の関係はわりに複雑である。審美と文芸は想像的な情感の体験であり、極端に言えば、囚人でさえ高踏な詩を書くことができ、専制社会が審美的な傑作を生むことも出来るのである。通常自由と切り離せない民主社会は、かえってある芸術家からは文芸の障碍と見なされるのである。<sup>(4)</sup> よって二つの自由を分けるべきであろう。一つは形而上学と倫理学上の意志の自由であり、それは特定の社会政治条件とは直接関係がない。二つには政治的自由であり、それは主に政治経済が調整し、法律が保障する個人の権利であり、それは個人の行為が意図的な束縛と強制を受けないということの意味する。欧米の美学史上、カントは審美経験を「利害と切り離す」著名な分析において審美と認識、倫理との間に境界を定め、自由主義美学のために哲学的基礎を与えた。この後西欧の主流美学と文芸理論において、審美的行為と文芸活動は個人的権利の一部と見なされ、ふつう政治関与と道徳的束縛を受けない。また文化体制や法律制度があらかじめ保障されている。

王国維に始まる近代中国美学は、主にカントの流れを継承している。20年末には、自由主義文芸はすでに中国に根付き開花していた。それは「胡適派」を中心として徐志摩、梁実秋、陳源を代表とする「新月派」、現代評論派周作人、沈從文、楊振声を代表とする「京派文人」および林語堂の「論語派」等に見られる。1932年、まさに自由主義と左翼革命文学が緊張対峙するとき、朱光潜は海外から8年ぶりに北京に戻り、彼の知識背景は、学術観点と社会関係など全ては彼を自由主義の側に規定するものであった。西欧美学への深い理解と外国文芸への深い学識と教養を携え、朱はカントとクロウチェ主義を基礎とし、「直覚」「距離」「移情」などの概念を道具として、審美と人類のその他の生きた区分を出発点として、文芸と人生の関係を中心とし、中国の自由主義に最も完璧な美学理論をもたらした。注意に値するのは、朱が詳らかにするのは審美は実用でなく、概念でも思考でもなく、審美経験は極端な精神を集中する心理状態であり、美感の対象は独立自足した世界などの形式主義美学の「欠陥を補う」。私たちは審美経験を分析するのにほとんどカン

トからクローチェに伝わる態度を採用する。この態度は形式主義を偏重し文芸と道徳との何らかの関係を否認するものである。審美経験を独立したエリアとして確定し研究するものである。私たちは「形象直覚」「意象孤立」および「とらわれない鑑賞」などの諸説はおおかた非難すべきところがない。しかし根本的問題は、審美経験を独立したエリアとして切り取り、その因果関係を問わないで済むだろうかということである。芸術と人生の関係は審美経験の小さな範囲で決定されるのだろうか。形式派美学の根本的な誤りはこのような重要な問題をなおざりにしたことにある。<sup>(5)</sup> 朱の形式主義に対するもっとも重要な修正は、審美は人生から独立し得ないという指摘である。「形式派美学の弱点は過去の機械観と分析法を信任するところにあり、またそれが人を科学、実用（倫理を含む）そして美感という三つの区分に分析することであり、「人の美的感性」についてのみ検討するところにある。それは「美感の人」を忘れると同時に「科学の人」「実用の人」も忘れる。科学の人、実用の人、美感の人三種の思想活動は理論上分けられるとしても、実際の人生においては分けることはできない。<sup>(6)</sup> 二つ目には芸術は単に審美だけにはない「私たちは美感が芸術活動全体のごく一部であることを承知している。審美経験は純粋な形象の直覚であり、直覚は瞬時に消え去る動きにすぎないが、芸術の完成には長期間にわたり努力を続ける必要がある。…審美経験は直覚にあり、意志と思考にあるのではない。しかしすべての芸術活動には実は意志と思考が必要であるのだ。」<sup>(7)</sup>

審美の独立は何も目新しい議論ではない。朱が1957年にのべているように「この考えは私一人の考え方ではなく、きわめて普遍的な考え方である。以前中国の多くの知識分子はそう考え、多くの外国の知識人もそう考えた。今に至るもイギリス、フランス、アメリカなどの資本主義国家の多くの文学者と芸術家もやはりこのように考えている。この考え方は長い期間を経て、すでに奇抜な荒唐無稽なものではなく、至極あたりまえな道理となっている。」<sup>(8)</sup> 形式主義に対する偏至とそのイデオロギーの批判も朱光潜に始まったわけではない。朱光潜美学の現代中国における意義は、単に彼が率先して審美独立論を完全なかたちで導入し、中国文化現代性の建設に参加するのみならず、さらに彼が審美の独立、芸術の自律と政治的自由、人道主義という二大歴史主題を関連づけ、中国の自由主義と文芸における主要な発言者となったことにある。1948年に『自由主義と文芸』という一文において朱は、自由と奴隷は相反し、自由主義を擁護するなら奴隷制度に反対しなければならないし、生物学と心理学からいうならば、自由と「抑圧」「破壊」とは相反し、自由主義を擁護するなら抑圧と破壊に反対しなければならないと指摘した。「自由の二つの意味は互いに成り立っている、奴隷は抑圧から逃れられない、自主的であってはじめて自由な発展がある。つきつめて言えば、私の理解する自由主義と人道主義は骨子においておなじことである。」いわゆる文芸の自由は、第一には文芸は自主であり得る、それは奴隷の活動で

はない、第二に文芸の要求は人性においてもっとも尊い一点であるためにそれは自由に展開すべきである。だから問題は文芸が自由であるべきかということではなく、私たちに真に文芸が必要であるか否かである。自由は文芸の本性であり、文芸には創造性が備わっている、それはすなわちその自由性に他ならない。創造性もしくは自由を失った文芸はもとから文芸にはなり得ない。<sup>(9)</sup> 現代中国の言語的脈絡において朱光潜の美学は三つの内容を包含している。

審美の独立から文芸の自由を要求している。自由主義は左右両極端に反対する、国民党にも文芸政策があったが創作活動を積極的に組織化することはなかった。文芸を有効に党統治の道具とすることはあり得なかった。それはさらに多くは消極的な禁止、野蛮な審査、その党化の強度と範囲はおしなべて限度があった。知識人に対する管理もそれほど緻密ではなく、文芸はその統治下においても一定の自由空間を維持し、左翼文学もまたこの自由を利用して国民党の「不自由」を批判したほどである。30年代から40年代末、朱は依然として政府の独裁専制を批判したが、多くは左翼文学が甘んじて「政治の蓄音機」「スローガンのメガホン」になっていることを批判した。

朱はもともと温厚な人柄でその文章も親しみやすいが、ひとたび革命文学について語ると、きわめて感情的になる。「付和雷同のやから、文芸の美名を騙り突貫する下っ端役人、道徳的にも芸術的にも低級な趣味の陳列。」「小資産階級の生活をしながら、そのやり口はブローカーや悪徳地主とかわらず、口先では社会の暗黒を呪詛し、少しばかりの主義を論じ、幾つかのスローガンを叫ぶだけで、もう革命家きどりだ。数えてみればきりが無い。まるで見掛け倒しの人非人だ。」<sup>(10)</sup>

審美の自律に基づき人生哲学を唱導した。度々不幸に見舞われてきた中国で、美学者たちは現実社会の重みに打ち拉がれていた。彼らの功利を超越した形式派の美学は人性を救済し、民族文化再建の内容を賦与していた。現代美学の特性はそれがしばしば人生哲学に転化することにある。「青年に与える12の手紙」から「修養を語る」まで朱は現代美学の「花」を中国道家思想の「木」に接ぎ木し、「人生芸術化」の人生観を唱導した。消極的な意味では、このような人生観は冷徹な理知とあからさまな功利が人生を統治することに反対するものである。積極的な意味では、それは人を本位となし人が知と情と意をもって、また様々な本能によって合理的な自由な発展を得られることを希望するものである。これがまさに積極的な意義である。朱が言うには、

私は中国社会がこれほどまでに混乱をきわめているのは、決して制度問題ではなく、大方は人心の頹廢によるものと堅く信じている。私は情感は理知より重要であり、人心を刷新すると信じている。道徳家の二言三言でけりをつけるのではなく、「精神修養」

からはじめて、衣食足りて、高官厚禄を求める以外に、もっと高尚で、純粋な追求であると信じる。人心を浄化しようとするならまずは、人生を美化しなければならない。<sup>(11)</sup>

審美の自律によって民主政治を要求している。国民党が名望のある人士はすべて入党するよう規定したため、1939年に武漢大学で教務長に任じた朱光潜は国民党員となり、のちに国民党中央監察常務委員になる。しかし国民党の粗忽で軟弱な思想のコントロール能力では朱光潜が長きにわたって堅持してきた自由の立場を変える事はできなかった。国民党人としての身分で、朱は政治的抑圧下での知識分子の苦痛を深く感知した。「執政党は彼が左となることを嫌い、野党は彼が右の立場をとることを嫌った。政治において尊くも最も得がたい徳行は寛容であり、今日の中国の政党では寛容など語ることも憚られる。あなたが私の友人でなければ、即私の仇敵なのだ。すでに私の仇敵であるなら、わたしはあなたを打倒せざるを得ない。これは執政党でも野党でも一致して見られる考え方である。彼らは自由分子に対していずれも目の中の釘として見ている。いつ何時でもそれを取り去りたいのだ。」<sup>(12)</sup> 朱のすべての時評・政論はすべて「合法秩序の擁護者」の役柄から、執政党、革命党を問わず批評し、いかなる民主憲政への妨害、言論自由への制限についても反対するものだった。比較的、彼は既成の秩序に一定の寛容さをしめしていると言える。「動乱の局面においては人々は気持ちが悪立ち、容易に全ての災禍を執政党になすりつけるが、これは歴史が必要とする洞察と客観的な態度を損ねるものである。」<sup>(13)</sup> 1948年に至ってもかれは国民党は「社会の賢達と自由分子」を含む「第三党」を「善意から扶助した」と主張しており、以て難局を招いたのである。大多数の自由分子は国共が地位を入れ替えた現実を鑑みて政治上の自由主義からすでに思想文化上の自由主義への後退と考えたが、朱は依然としてはっきりと政治上の自由主義の立場を堅持していた。

朱の思想は美学、人生観、政治的立場の三つの側面を内包していた。共産党から見ればそれらは全てが「反動」の性格である。文芸自由の要求は、すなわち革命文学への反対である。人生修養をもって制度革命に代えるのは反動統治の擁護となる。政治自由の主張は共産党の政権奪取に反対することになる。かつ「抗戦前後の約10年間、わたしの論著は市場でベストセラーであった。私が手にした読者の手紙からは、青年たちがわたしに夢中になったというのが特に多かった。」<sup>(14)</sup> なるほど魯迅が彼の「静謐」の美学観を批評して以来、革命文学、周揚、茅盾、巴人、阿垅らが彼の美学思想をこぞって批判したのも怪しむに足りない。1948年新政権は迫真に迫る勢いで、朱の三つの領域での影響に対して、朱批判についても三つの領域相互に目配りしながら展開したのである。

美学観点においては、蔡儀が1944年に出版した「新美学」においてすでに朱を「旧

美学」の代表として学術上の批判を加えた。1948年9月にはまた命を受けての著作「論朱光潜」を著して、朱の美学が学術上の「中体西洋」であると指摘した。「没落した地主階級の士大夫意識を主として—西洋の大家を後ろ盾とし、看板にかかげた」としてさらに、重ねて朱が「調和と折衷」によって作り上げた理論は「いたるところ矛盾だらけで、破綻に覆われている。」<sup>(15)</sup>

人生哲学については、郭沫若が「反動文芸に反駁する」の一文を書き、朱を国民党の「藍色文芸」の代表と認定したあと、集中して朱の人生観を告発している。朱はすでに「人生には二つの類型がある。生まれつきの観客と、生まれついて劇を演ずるものと。」との観点を提出している。郭の文はここにおいて際限なく原則にのっとって言葉もぞんざいに「私自身がどちらの類型に属するのかわからないのだが、自らも昨今の大文芸思想家を「傍観」してきた。重慶で訓育を受けていたとき、康沢に対して特に「恭しく」軍令を執り行っていたのは「観劇」なのかそれとも「演劇」だったのか。私はここでもう一步踏み込んで訊ねたい。当時国民党が政権を取っていて、恣しいままに人民を支配していたのは、党のお偉方たちがみな「生まれつき劇を演じる」人々であったためであり、民衆たちが「生まれつきの観客」だったからなのか？ 朱教授のロジックに照らせば、一つの答えが出る「そうだ！」まじめに言うなら、これは偉大な朱教授の「思想」の核心とセットになっている。彼の文芸思想もまたここから出発しているのである。」<sup>(16)</sup>

政治的立場については邵荃麟が「朱光潜の卑怯と残忍」の中で朱の「群衆観」を批判している。「この一年來、私たちは多くの御用文人の無恥な文章を見てきた。しかし私たちは朱光潜が「周論」第五期に発表した「大衆が臆病と残忍さを身につけていることについて」ほど卑劣、無恥、悪辣な文を他に見ない。この国民党常務監察のお偉方は、厳然としてゲッベルズの姿態で出現したのである。」<sup>(17)</sup>

49年に成功した革命は、政権の転移だけでなく、未曾有の社会文化の徹底改造であった。48年の批判はその後発展する学術思想のモデルを予告していた。それは政治批判と思想闘争を根本前提、基本方式としていた。朱のような自由主義者が新政権下で執筆を継続しようとするなら、換骨奪胎の改造を進めることは必至であった。

## 二、底辺の攻防、政治から思想、さらに学術へ

郭沫若の文章は1948年「五四」記念夜会の席上、北大の進歩的學生によって公開された。朱は「恐れと憂い」を感じざるを得ず、二度にわたる出国の打診も、成功を見なかった。<sup>(18)</sup> このとき、国民党が手を尽くして彼を台湾へ連れて来ようとする「学者の緊急移送」計画において朱は三人目に入っていた。もう一方で共産党と関係のある北大の化学教授袁

翰青は積極的に遺留を進めた。朱は最終的に大陸に残ったが、心理的には疑念と恐れに充ち1974年に回想しているように「北大の同僚である陳雪屏が出国のとき私の家にきて出国を勧めた。わたしは彼にどこに行くのかとたずねた。かれはまず南京に行くと言った。わたしは情勢をみたところ、南京も安全とはいえない、そのあとどうするのかと訊ねた。かれは最後には台湾に行くという。私はまた大陸は多くの山河に隔てられていても安全ではないのに、たかだか台湾の孤島で身が守れるだろうか？」<sup>(19)</sup> 国民党への信頼を喪失していたことを除いても朱は学者であることを自覚し、たとえ波乱万丈の1948年にあっても、文芸鑑賞から社会評論にいたるまで、従容として学者としての本分を尽くしていた。この年に『朱光潜文集』に収められた文章は40篇あまり。これを残した理由として「どのような党派にあろうと、教育を行わなければならないし、学問と教育に身を投じる学者でなければならない。」「時局がいかに変化しようとも学問研究は政治的色彩に染まらず無関係でなければならない。」<sup>(20)</sup>

歴史は朱の判断を実証していない。台湾は長期にわたって国民党が支配し、新政権は当然教育を奨励したが、それは党が創造した完全に刷新された教育であった。朱は自ら政治的色彩に染まることはなかったけれども、その政治身分は、北京が解放されたのち、「歴史問題」によって八ヶ月の管制を受けることになるのである。

49年以後知識分子改造のやり方は、間断なき政治運動であった。最も重要なのは最初の三回であり、1949年2月から1950年下半期にわたる政治学習運動。1951年秋から1952年夏にわたる思想改造運動。1954年にはじまる資産階級学術思想批判。三回の運動は互いに関連し、それぞれに偏重をきたしていた。分けるならば、政治的立場、思想観念、学術思想の三方面から徐々に浸透し、その意図するところは全面的な旧知識分子の思想改造にあった。<sup>(21)</sup> 朱光潜は、罪を認め、懺悔するしか生まれ変わる方法がないことを承知していた。そこでどの運動においても、彼は率先して自己批判し誠意ある態度を取る一人だった。

政治学習運動中の49年11月、朱光潜は『人民日報』に『自己批判』を発表し旧教育が彼を「一人の自由主義者に育て上げたこと」、政治的には改良の態度を取り、学問上は現実を離脱していたと、認めた。彼はまじめに学習して「時代と人民大衆に迫りつく努力をする」ことを表明した。運動の期間、彼は西北に赴いて土地改革を視察し、戻ってから『西北土地改革を見学して新中国の偉大さを認識する。』を書き、毛沢東の承認を得て1950年3月27日の『人民日報』に発表した。<sup>(22)</sup>

思想改造運動の厳しさは前回は遥かに凌いでいた。教授たちは出身家庭から、受けた教育、研究の成果まで群集の前で懺悔して、共産党の組織と「群集」が認めればようやく難を逃れることができた。朱光潜と北京大学法学院の周炳琳は北京大学の重点となってい



た。常風先生の回想によれば、運動は「始まったときはまだ朱先生に触れることは無かった。かれは、やがて小組長が指導する西欧語系教師として学習を命じられ、その後彼に調査が回ってくると西欧語系唯一の主な標的となった。最後には北京大学全学で重点的な批判対象の一人となり、不断に全学部の小会議の席上で、また全校の教職員学生の大会の席上で批判を受け続けた。<sup>(23)</sup> 朱光潜の学生朱虹は数十年後に会場の情景を思い出して述べている。「一晩で彼の髪は真っ白になった。」<sup>(24)</sup> 会議での批判ばかりか、彼を侮辱する漫画展も開かれた。

この展覧会がどれほどの時間と労力を費やして構想されたものかはわからないが、画用紙と絵具を使ってこしらえた一連の漫画で、小さな辮髪を引きずり、天地祖宗を祭る位牌の前に跪いてその生涯が始まる一連の漫画である。学部の同志が言うには、朱光潜先生にも見ってもらってどんな意見か聞いたということである。朱先生は「たいへん結構」と言ったが、数日過っても展覧会開示の布告は見られなかった。ある人が言うには上層部が同意せず、続いて展覧会室も撤去された。<sup>(25)</sup>

朱の懺悔が認められて、1952年には「学内での調整」後、朱は北京大学に遺留されたが、一級教授から七級教授に降格された。北京大学が移転してから、彼に支給されたのは台所の裏部屋で、1956年に常風が彼を見に行ったとき、「そこで見たのは大雨の後、部屋の紙を貼った天井は雨水に濡れて崩れ落ち、ようやく半分残っているだけだった。寝室のベッドには二つのたらいが雨水を受けていて、外の客間も水漏れしていた。」<sup>(26)</sup> 当時の手紙の中で、彼はいつも「生活は何とか維持できているが」「研究はすでに停頓した」と繰り返している。これ以前の革命文人による彼に対する批判が言論闘争の域を出なかったとすれば、この時の批判は、すでに権力の意志に基づく圧迫であり、収奪であった。

1954年10月、毛沢東はすでに『紅樓夢』研究問題で、資産階級唯心論を批判する動員令を発していたが、ここにおいて資産階級学術思想批判の幕開けを見た。1956年6月『文芸報』は朱の『私の文芸思想の反動性』の一文に編者注解として次のように指摘した。

朱光潜先生の文芸思想は唯心主義である。彼は全国の解放以前に、長年にわたって美学研究に力を注いできた。前後して出版された彼の『文芸心理学』『美を談ず』『詩論』などの著作は、系統的に唯心主義の美学思想を宣伝し、知識青年の間に大きな影響をもたらした。ここ数年、特に去年知識界が展開した胡適、胡風に対する思想批判以来、朱先生は自己の過去の文芸思想に対して批判を開始した。現在幾編かの文章は、一歩進んで彼が古い観点を放棄し、新しい観点を得る努力を表明している。——我々は本刊において引き続き美学問題に関する文章を発表する予定である。その中には朱光潜先生の美学観点に対する批評や彼の美学問題についての文章も含まれている。私た

ちは十分に、自由に、真摯に互いに討議、批判してこそ、真に科学的マルクスレーニン主義の原則に則った美学を徐々に打ち立てることが出来るであろう。

朱を胡適、胡風の後になを連ねること自体が、きわめて危険な兆候である。しかし明らかに言えるのは朱の批判は新美学を打ち立てるためであり、火薬のきな臭さはそれほどではない。50年代に朱によって始まった美学討論の性質には、二つの評価がある。比較的代表的な見方というのは、これは当時の環境下では民主的な雰囲気最も強かった学術討論であり、「これは建国以来、わが国の学術界が最も徹底して百家争鳴を貫徹した十分突出した現象であった。」<sup>(27)</sup> もう一つの評価は80年代に張隆溪が提出したもので「50年代以来度々の思想改造運動と同じく、このような美学討論も単純な学術論争ではなく、政治闘争であり政治的動物としての人がこの闘争の最後の砦となった。」<sup>(28)</sup> 朱本人の言い方は些かあいまいである。「美学討論は党の指導のもと、『文芸報』によって1956年に組織的に始まった。」「美学討論が開始される以前、胡喬木、鄧拓、周揚と邵荃麟がそれぞれ私に声をかけた。彼らが言うには今回の美学討論は思想浄化のためで、個人を粛清するわけではない。」<sup>(29)</sup>

当然党による指導は細心に仕組まれたものであり、賀麟、蔡儀、黄葉眠、敏澤らによる朱批判の文章は早くに準備されたものである。<sup>(30)</sup> 政治至上の時代にあつていったい純粋な学術討論があり得ようか？ 胡喬木らの人々が「警告を呼びかけた」時には、一方では胡喬木らの朱に対する善意を容認しておいて、もう一方では一般的にいう政策転換をすすめたのかも知れない。毎回の学術思想批判の公のスローガンは「思想浄化」ということであつたが、それが粛清でなかったことがあろうか。しかしながら、比較して言うなら、美学討論は確かに「嵐の前の静けさ」だった。朱が批評に反駁する文章を発表することもできた。討論期間にはまた一級教授に引き上げられ、政協委員に任命された。かつ、マルクス主義の名義のもと、さまざまな美学観点が呂熒の主観論さえも含めて公に公表された。討論について最後には一人の指導者により判官式の結論が下されることもなかった。これは1949年以降休む間もなかった「思想批判」「学術討論」においては実に珍しいことであつた。

美学討論の特殊性について、錢念孫は重要なのは「双百」方針が提出されたために、朱光潜を批判する陣営の内部に意見の分裂が生じたことであると考えている。<sup>(31)</sup> 前の一点は朱が四日前に発表した文を指している。陸定一は中央を代表して『百花斉放・百家争鳴』の報告を行い、美学討論は幸いにも「鳴放」の雰囲気の中で開始された。後の一点は、朱批判の主将となる蔡儀や、同様に朱を批判した黄葉眠もまた唯心主義であつたことを指す。彼の黄に対する批評は客観的に組織者の思惑を攪乱するもので、比較的自由な討論を引き出していた。幾つかの問題を解釈することはできるが肝腎な部分ではないということである。「双百」は「右」のあとまじりに実行されることはなかった。また美学討論がさらに後

の60年代はじめに至って、蔡儀の黄葉眠に対する批判のように異なる観点の間で譴責を誘発することは予測できた。しかしこの文章は運動の大きな方向を攪乱することはできても組織のコントロールを明らかに見くびっていたといえる。この討論の背後で画策されていたのは組織上、朱に対する組織の政策的な掌握であったのか今もってはつきりしない。多くの材料が発見される以前、十分考慮すべきは、かつて朱の学生であった胡喬木や、何其芳が1939年に朱に手紙を送っている周揚らが、朱に比較的友好的であった事実である。<sup>(32)</sup>

本当に重要なのは、三回の運動が異なった性質を備えていることである。政治学習と思想改造は明確な目標を持ち、際限がないものであった。これが「三座大山」に対する反対である。共産党と社会主義（政治）を擁護して、資産階級唯心主義を批判し、マルクス主義を受容する。指導層を容易に掌握し、旧知識分子も比較的受け入れやすく、共産党の天地を覆す偉大な功績の面前で、遍く行き渡る権力の監督のもとで、彼らがいかなる反抗もできなかったばかりではない。かつ政治思想上の認識が畢竟、抽象、原則化して容易に批判をかわすことが可能だった。しかし、学術思想批判の段階では經典著作であろうと政治権威であろうと具体的な学科に確固とした答案を与えることは無かった。そこで批評の対象は明確であるのに、批評の基準と達成すべき目標は明確とは言えなかった。たとえばマルクス主義はどのように美感を分析するのか。いかにプラトンの美学を評価するのか。これらの問題は討論を要するものである。運動の組織者や指導者に言わせれば、学術思想上の敵と我とは境界線がはつきりせず、曖昧模糊としている。政策的な掌握はむしろ慎まなければならない。学者にとってみれば学術に専念することは自由の立場や「唯心主義」に比べて「安心立命」をはかる手段であった。これに比べれば、政治、思想、学術はさらに過去と決別し難いものであった。よって以前の二回の運動とは異なり、学術思想批判は客観的に見て、何年も発言の機会がなかった学者たちに限られた制約のもとで言論空間を提供し、ここから彼らのそれぞれの「後期」の生涯が始まるのである。

三回の運動のそれぞれの性質を朱は深く理解していて、それぞれの運動で異なった表現をしていた。政治学習段階で、彼は少しも学術思想上の誤りについて述べていない。49年末蔡儀は比較的婉曲な言辞でふたたび朱の「移情論」「距離論」を批判してきた。翌年一月、朱は『美感問題について』を発表し、旧説に誤りがあることを承認し、勢いに乗じて反問している。「無産階級革命の今日、過去の伝統の学術思想はすべて打倒され奈落の底に落ちてゆくのだろうか。やはり歴史の発展は歴史の連続性にある、弁証法の高い段階はたとえ後ろにある低い段階を否定するものであっても、同時に低い段階のものを保留し融合するものではないだろうか。」「この見方によれば、美感経験は概観から見れば決してマルクス主義の観点と融合しない。しかしこれは十分に熟していない摸索であり、ここにその

概要を提示して、マルクス主義の学者にご一考願いたい。」<sup>(33)</sup> 彼は政治上の新しい認識が必ずしも旧学術を否定するものとは考えていなかった。むしろ旧学術はマルクス主義と融合すると考えていた。このような考え方の人も必ずいるであろう。しかし公に表明したのは朱一人であった。

新しい時代は朱の自信と自立を容認するはずが無かった。『文芸報』は矢継ぎ早に蔡儀、黄葉眠の文章を発表した。朱を叱責するというには「彼は芸術と現実の人生との関係を否認した。ここにおいて彼は文芸と現実の人生の最も主要な一面が政治的結合であることに反対し、よって彼はこれまで革命文学に悪辣で痛烈な叱責をもって対してきた。」<sup>(34)</sup> 「朱先生の学説は、われわれの今日のマルクス主義思想と直接に衝突する位置にあり、われわれの今日の文芸運動と背反する」<sup>(34)</sup> 1954年11月7日、文聯と作協主席団は会議上で、まさに周揚らの人と力を入れた胡風の『文芸報』における批判で「資産階級に投降する」としたときそこに朱光潜も加えられ、先に旧事が再度提出されて「反動統治の長い期間、われわれは朱光潜という名を目にするたびに心を痛めた。——彼は資産階級唯心論をもって美学の領域に深く侵入し、広大な戦場を「開拓」して、単純な青年および文学教授の間にきわめて危険、有害な影響を及ぼした。彼は胡適派の旗幟のもとに、胡適派学閥の大黒柱となった。かれはこの基礎に立って、変わることなく蒋介石のために働いた。」とした。その後朱光潜の1950年における蔡儀への反批判はマルクス主義への挑戦と見なされた。「彼は純粋な学者をもって任じ、もし誰かが彼の理論を「歴史的還元」とするなら、彼らを「執今責古」と罵り、「毒に染まった読者」が批判の責任を取らないなら、人々が彼の理論を「すべて打倒して奈落の底に投げ込もうとしている」と罵り、彼の学説が「必ずしもマルクス主義の観点と融合しないとも限らない。」と宣揚して、示威的に「マルクス主義者の人々にご一考願いたい。」という。これが挑戦でなくして何であろう。」<sup>(35)</sup> 思想改造はついに朱を屈服させた「去年蔡儀諸氏は『文芸報』で私の美学思想に批判を加えた。当時わたしは心の中で不服だった。この一年わたしは新文芸理論についていささか研究を行ってみて、ようやく私の基本的立場と観点がすべて誤りであることがわかった。わたしはここにおいて読者と批評家にお詫び申し上げたい。」<sup>(36)</sup> 一年の学習は数十年の立場と観点を覆し、心に染まぬまま反映論について論じるのは、実は消極的抵抗であった。1957年に朱は認めた。「五六年もの時間をかけて私は一編も学術的な文章を書かず、一冊もまともな美学書籍を読まずあるいは美学上の問題に思考をめぐらすこともなかった。このような状況になった理由は、わたしが望まなかったのではなく、あえてやらなかったためである。——「群集を扇動して攻める」という形勢のもとでは、わたしは心中、日に日に深い罪の意識を持つようになり、頭をあげることもできず、当然口を開くこともままならなかった。」<sup>(36)</sup> 「口を堅く閉ざし、心は従わず。美学上、わたしを説き伏せようとするなら自ら美学を理解しなければならず、

私が理解するところの道理で私を説得しなければならない。その帽子が適当かどうかはかまわず、ただわたしに帽子をかぶせるのでは、問題を解決したことはない。ただ「マルクスレーニン主義美学では」という切り口上で私を脅すのでは問題の解決にならない。」<sup>(37)</sup> ことばを変えれば、猛威を振るって、人々に畏怖の念を抱かせた「政治学習」「思想改造」運動は、美学上は決して朱光潜を屈服させることはできなかったのである。

「学術思想批判」はすでに「学術」の名で、朱は大きく譲歩したと同時に、依然として学術上の自己弁護と釈明の権利を保持していた。かれは自分が過去において政治上「人民の革命事業に甚大な危害を与えた。」こと、思想上「主観唯心主義」であることを承認し、美学上は前期の「混乱乱雑」「自己撞着」を自己批判したが、「主観客観の統一」の基本観点を放棄しようとはしなかった。こののち、朱は政治上、党と意見の一致を保ち、たとえ1957年の「鳴放」の期間においても「右派」の言論を用いず、思想上はマルクス主義を信仰し、1983年の香港でも一貫してことあるごとに「私は共産党員ではないが、一人のマルクス主義者である。」と吹聴した。このような条件のもとに、彼は慎重に政治を利用し、思想と学術の間隙を縫って、積極的に学術上の発言権を争った。応酬し、批判に弁護し、多くの著作と美学論文によって、自ら鮮明に烙印した「マルクス主義美学」を打ち立て、さらに学術、思想に踏み込んで、長期にわたり被改造者の身分で同時代の思想運動に参加したのである。

### 三、主観の救済・旧観点と新しい解釈

49年以後、真理を壟断したイデオロギーとして、マルクス主義は中国において権力操作の一部分に過ぎなかった。また最高指導者を除いては、何人もマルクス主義を解釈する権利を持たなかった。朱光潜のような「旧知識分子」は、敬虔に誠意を持ってマルクス主義を受容し、マルクス主義の権威を認める以外のいかなる態度も許容されなかった。主に二つの理由のために。そのひとつは学習と受容の過程で、自ずから創造性が生じ、必ずやそれを自由に発揮する空間が生じるからである。

朱が自ら言っているように、たとえ抑圧された環境の中にあっても前期の美学を完全に否定しなかったとしても「誰しも過去の歴史の中から何かを学ばざるを得ない。もしこれを批判的に継承するなら、過去のものは一方で一部が保存され、もう一方で必然的に新しいものに転化する。」<sup>(38)</sup> 前期思想は彼のマルクス主義の受容に直接関与した。新旧の間には継承転換の可能性があるので、まず朱がマルクス主義に対して決して完全に理解していなかったわけではなく、社会主義に対しても悪い感情は持っていなかったため、彼の理想はアメリカ式の民主政治とソ連式の世界社会主義経済の統一であって、世界の出路は「アメ

リカが集团的にその経済的作風を放棄し、その政治における理想を保つこと、ソ連が集团的にその政治的作風を放棄してその経済における理想を保つこと。」<sup>(39)</sup>であった。中国の自由分子は多くが計画経済を認めており、それが彼らが40年代末に大陸に残った根拠でもあった。次に学術思想上においては朱は前期における主観と客観の統一を忠実に守った。しかし彼は審美経験の中の「情趣と意象の符合」に決して満足していなかったし、十分に哲学的な解釈を得ることを希望していた。40年代、彼は仔細にクローチェ哲学を研究した後、カント、クローチェに連なる唯心主義が、心物二元論を打破するとの意図は惨敗を喫した。このように、カント、クローチェを基礎とする前期美学も頼みにはならない。マルクス主義が政治的な権威をバックとして彼に信奉を要求してきたとき、まさに「痛惜と失望」の心情を抱いた朱光潜はすでに最低限度許容される空間へと自己を移行させていた。もし朱の前期の美学研究が基本的に「全ての哲学的先入観を捨て去り、文芸の創造と鑑賞を心理的事実として研究する、事実からいくらかの文芸批評に適用できる原理を帰納する」<sup>(40)</sup>のであるとするなら、一方でマルクス主義の特徴はすなわち、マクロな哲学系統であるとは言え、文芸に対する具体的な論述はきわめて少ない。このことは朱が前期部分の経験的成果を接木する過程で、後期思想において再びそれを自己のものとすることを可能にした。

マルクス主義から言うならまず、それは多くの伝統と歴史的思想体系を含み、多くの組織立った共産主義運動を有するのみならず、様々な知識グループもそれぞれのマルクス主義を有する。カウツキーらの科学的マルクス主義、レーニン、スターリン主義「西方マルクス主義」など。マルクス主義史において、事実上様々な解釈学的実践、多様な論点と多様な論争は決して消えることはなく、マルクス主義受容において理解の差異は避けられなかった。次にたとえマルクスが社会構造とその変動の一般理論において、文芸実践に対する理解に強力な論理力を有していたとしても、マルクス主義經典作家は畢竟、既成の美学モードを提示することはなかった。まさに朱が言うように「マルクスレーニン主義美学は依然として美学を研究する人たちの奮闘の目標に過ぎず、構築を待たれる科学に過ぎなかった。今や全ての人が堂々たる看板を掲げているが、しかしどの人も葉籠の中身は違うのだ。「マルクス主義美学」の看板のもとでは、「百花争鳴」があるのみだ。」<sup>(41)</sup>マルクス主義が全ての美学領域を覆ってはいない。それはその信奉者たちに基本原理に沿ってある程度の自由な解釈を許しているのである。

しかしイデオロギー的な雰囲気の中での「百花争鳴」は必ず「一つの派」を基準とする。具体的に言えば、流行しているマルクス主義の観点について批評も、修正もできる。しかしその前提になるのはマルクス主義經典の「原義」にさらに近づけることである。このような「原義」の追求と現代解釈学が歴史的経験と言語現象をたのみとして「原義」の束縛

を解くのとまったく相反するようだが、思想統制のもとではいかなる創造性も合法性の源泉となるのである。朱の後期のマルクス主義に対する受容と理解はこの様に典型的な解釈学の実践であった。1956年、朱はマルクス主義に対して期待を述べている。

美の問題に関して、—このような答案が出されている。「美は物にあるのでも、心にあるのでもなく、それは物心の関係にある。」ここで話をやめれば、わたしは今に至るも美についてこのように考えている。やはり美の問題を解決してこそ、主観と客観の統一に達するのだと考えている。しかし話は決してここで終わらない。続けて私は言う。「しかしこの関係はカントと一般の人が想像するものとは異なる。物に在っては刺激となり、心に在っては受容となる。それは心が物を借りたイメージで情趣を表現するからだ。この世界は所与のものではなく、いたるところに美を発見するのは、凡ての美が心霊を通じて創造されるためだ。—美は情趣のイメージ化あるいはイメージの情趣化によって覚える「調和の」快感である。」私がかつて言いたかったことは「美は心と物の関係にある。」わたしが実際に説明したのは「凡ての美は心霊の創造を経る。」物とは関係ない。—このような美は畢竟、直覚にあり、そして心にあり、そして主観的なものだ。

答案は誤りない。誤っているのはこの答案に対する説明である。「私は今に至るも美に対してこのように考える。やはり美の問題を解決しようとする。必ず主観と客観の統一に行き着く。」<sup>(42)</sup>「客観論」が喧しい時代にあって、この答案を重ねて説明しようとするなら、肝要なのは審美活動における位置付けを確立することである。審美活動における「主観」の機能について、マルクス主義を以て論証、解釈することである。

これは難題である。50年代美学討論の指導的思想は主にレーニンの反映論で、存在は意識を決定する、意識は存在の反映であるというのが基本的内容である。<sup>(43)</sup>ここから推論すると美は客観的存在であり、美は美感を決定する、美感が美の観点を反映するというのがマルクス主義美学の結論である。現実には反映論はマルクス主義の観点ではない。その起源を見ると、それはプレハーノフと早期のレーニンが18世紀唯物主義から無批判に借用してきた機械論の思想である。20世紀マルクス主義哲学理論の大きな発展は、すなわちこのような受動的な、直観的な認識論の克服であった。内容から見ると「反映論は思想に受動的な影響を与える。よって意識はただ恭順に現実の後ろにつき従うばかりとなり、社会を改造する過程で積極的に働きかける力も失う。受動性以外にも、この観点は二元論を含んでいる。よってそれが存在と意識の間に、思想と現実の間に「反映」という楔を打ち込む。この二つは切り離せない。それらは創造性と実践がともなった行動によって統一

された形に合わさるのである。」<sup>(44)</sup>しかし50年代の中国マルクス主義哲学はマルクスとレーニンの区別もつかなかつたし、ルカーチ以後のマルクス主義の新発展に触れることもなく、反映論が天下を独占支配し、反映論を運用する美学界は「唯物崇拜」に満ち満ちていた。ただあくまで主観客観の統一の信念に従う朱光潜のみが非常な勇気をもって指摘する。「美学家たちは「主観」というカテゴリーに対してきわめて大きな疑念を抱いている。——人々は「主観」と聞くと、「唯心主義」を連想する。人々は誤りはただ客観的事実を抹殺する主観のみであり、哲学上はそれが唯物主義であろうと唯心主義であろうと「主観」というカテゴリーが永遠に消滅しないことを忘れていたのだ。」<sup>(45)</sup>1957年に発表された『美の客観と主観の統一を論ず』では朱光潜は、マルクス主義美学は四つの原則を持つべきである、(1) 感覚は客観的現実を反映する (2) 芸術はひとつのイデオロギーである (3) 芸術はひとつの労働生産である (4) 客観と主観の統一。朱のマルクス主義美学に関する多くの論述は、反映論から始まっている、イデオロギー論と実践論を経て、美は客観と主観の統一との結論に向かっている。それはすなわち彼が「物を見て人を見ない」という反映論を克服し、主観の救済と連結させるための段取りであった。

第一歩は、イデオロギーを以て反映論を補足する。朱は当時あえて「反映論」を拒絶していなかった。しかしマルクスとエンゲルスを用いてレーニンを矯正していた。「レーニン」が『唯物主義と経験批判主義』の中で討論していたのは、一般的感覚と科学の反映で、社会イデオロギーとしての芸術あるいは美感の反映には一言も言及していない。われわれの美学家はレーニンの反映論を鵜呑みにして、審美のあるいは芸術の反映に当てはめようとする。よって、彼らはきれいさっぱりイデオロギーの美と芸術に対する影響を断ち切ってしまうており、「文芸はひとつのイデオロギーである」というマルクス主義の基本原則に違反する。」<sup>(46)</sup>「存在が意識を決定する」というのはただ反映論の一面であって、もう一面は「意識もまた存在に影響する」その根拠となるのは、マルクス主義が世界観、階級意識などの審美と芸術の創造的作用を強調していることであり、また美感を以て芸術、法律、政治、宗教などと並べて社会イデオロギーとなすことである。イデオロギーと反映論とを結び付けてこそ、唯物弁証主義たりえ、審美と芸術との自然科学とは異なる社会性を見出すことができるのである。朱は最初に二つの反映論を区別する。感覚あるいは科学的反映と審美的あるいは芸術的反映論である。前者は主観と関係なく、後者は「主観条件」(情趣、イデオロギーなど)の介入がある。その上で、美感の反映が科学の反映より大きいことを指摘するが、それには二つの段階があり、一般の感覚の段階は感覚が客観現実世界の反映であるとする。正式な美感段階は、イデオロギーの客観現実世界に対する反映である。レーニンの反映論は第一段階に適用される、マルクス・エンゲルスのイデオロギーが第二段階に適用する。その違いはやはりどれほど主観が問題にされるかである。美学に敷衍するなら



文芸は一つのイデオロギーであり、美は文芸の特性であり、よって美は必然的にイデオロギー的であり純客観ではあり得ない。イデオロギー論と反映論を綯い交ぜにする目的は、反映論の前提のもとで反映論を拡大し、主観的、イデオロギー的要素を審美的反映の過程に拡大することを承認し、美感の特性と複雑性を弁護することである。しかし第一に、当時のマルクス主義のデスクールにおいて、反映論が規定しているのは認識過程における意識と存在の関係である。そしてイデオロギーはすなわち歴史的唯物主義の理解するところの上部構造の一つで、それは反映論の中の「主観意識」ではない。二つの論は美感の反映の中で統一することはできない。当然のことながら「反映」を二つの異なった段階に分けることはできない。批判を受けた後、朱本人は自分の誤りを認めた。第二にイデオロギー論を以って反映論を補充する、実際には狭義の認識論の着衣を破り捨てるわけではなく、依然として客観現実の第一性質と決定性を脱却していない。朱が意欲的に強調した主観性は未だに有効な論証を得ていない。この二つの原因によって、朱は50年代から60年代にかけてますますイデオロギー論から実践論に転じていった。第二に実践論を以て、認識論に代える。生産労働を主とする実践は自然を改造することで人の物質的な目的行為を実現する。それは世界を認識するだけでなく、世界を改造しようとする。もし認識過程において客観現実が主観意識を決定するなら、その実践過程において主観は客観現実に影響を及ぼし、改造する。意識は常に積極的な精神として創造の現実の中に進入する。生産実践の中に在ってのみ主客体は真に互いに対象化し、互いに作用し、互いに豊かになる。朱は50年代の文章において既にマルクス主義の創始者が常に生産労働の観点から芸術を見ていたことを指摘し「単に反映論から文芸を見れば、文芸はひとつの認識過程に過ぎない。生産労働の観点から文芸を見るなら、文芸は同時に実践の過程となる。」<sup>(47)</sup>しかしここでの実践とは主に文芸家の「創意工夫」を指し、さらに認識過程における主観能動性に帰依する。数年の下準備を経て、朱は60年代全面的にマルクス主義的実践論を打ち出した。第一にマルクスは美の対象（自然あるいは芸術）を認識の対象とは見なしておらず、主に実践活動と見なしている。第二にマルクスは生産労働および審美過程における主観世界と客観世界の対立と統一の弁証法原則を解き明かしている。人は「人工化」された自然であり、自然もまた「対象化」された人である。80年代に至って、朱はマルクス主義の実践観点到最終的な理解を示した。

マルクス主義の美学観点と過去の美学観点の基本的差異はここにある。過去の美学家は大方単純な認識角度から問題を見るが、マルクス、エンゲルスは実践と認識の関係を正しく引き戻し、実践こそ認識の基礎であり真偽の基準を判断できると考えている。実践とは取りも直さず生産労働であり、文芸は精神的な生産労働であって、物

質生産と一致し緊密な関係にある。芸術は過去の美学家たちが言うように遊戯と労働に起源があるものではなく、労働は人が肉体と精神両面での「本質的な力」を発揮し、自然を改造し自己を改造するものである。人（主体）と物（対象）両方面において日増しに高度に豊かな発展を遂げ、共産主義社会に到達する。徹底した人道主義と徹底した自然主義が手を携えて進むのである。（人はその能を尽くし、物はその利を尽くす。）人の本質的な力の発展なくして物の潜在的な発展はない。よって主体と対象とは偏頗な扱いはできない。この道理は芸術にも適応されるものである。それはすなわちマルクス主義美学の実践的観点である。

朱は40年代に唯心主義で心物二元論を打破しようと試み惨敗を喫してから、長期にわたり機械的唯物論の圧迫を受けてきたが、ようやくマルクス主義の実践的観点を通して、歴史的唯物主義で心物二元を打破するという成功の喜びを享受したのである。もしこれ以前彼のマルクス主義概念に対する援引と運用に矛盾が絶えないと言うのなら、それはその実践的観点が形成された60年代初めに始まり、彼はマルクス主義の受容にもはや何の障碍もなく思うがままに運用していた。まさに銭念孫が言うように「朱光潜の前半生は、カントからクローチェに至る唯心主義美学に追随し、靈魂の安らぎを得ることがなかった。最後にはマルクス主義に帰依し、衷心からマルクス主義に服膺したために、マルクス主義が時代を画する意義を持つと認めたのである。」<sup>(49)</sup>

文化的環境と言説に根本的变化が生じて以降も、朱は綿密に經典の探索を根拠に部分的に前期の観点を堅持した。その動機と動力は「先の理解」の引導を差し引いても、彼が芸術に忠実であったことによる。前期の朱は、どんな哲学的主張からであっても簡単な演繹的推論を導き出すことに満足していなかった。そして常に芸術と審美経験の総括と分析に立脚し、終始芸術を対象としていた。彼にしてみれば、芸術を解釈することの出来ない理論は美学の基礎になり得ない、芸術の領域に立ち戻ってはじめて、主観的作用が立ち現れるのである。朱光潜の「唯心論」を批判する李沢厚も認めるように「科学は現実に対する冷静な、理知的な、抽象的な認識である。芸術はむしろ情緒的、感性的、具体的な理解である。よって、ほとんど「反映」ではなく、情感の「表現」のように見える。」<sup>(50)</sup> その他の論者も「主観唯心主義」が文芸の領域では特に頑強であることを認めている。前期、後期を問わず、朱美学の要義は審美、芸術と科学の認知を区別することであり、反映論がその区分の一方を満たすことはない。そこで客観論者が美学の対象はまず「現実美」（蔡儀）あるいは「美感」（李沢厚）と言う時、朱は譲歩することなく美学の対象が芸術であると認めていた。「正直に言って私が最も関心を持つのは芸術を「探索」し、美を「探索」することである。」<sup>(51)</sup> 政治思想上マルクス主義を受容してのち、彼は流行りの弁証唯物主義系統

から美の答案を獲得したのではなく、マルクス主義の芸術理論を探索したのである。反映論は、主観では芸術を解釈できないとしてこれを軽視したので、採用できない。イデオロギー論と実践論は主観が芸術創作と審美鑑賞に適合するとしたので、美学の哲学的基礎となり得る。朱には、すでに前期思想とマルクス主義の「視界融合」に達したと考える理由があった。「わたしは存在が意識を決定するという唯物主義の基本原則を受容した。これは根本から私の過去の客観創造形象の主観唯心主義を覆した。わたしは芸術をイデオロギーとなし、また芸術を生産労働となすこの二つのマルクス主義の文芸に対する基本原則を受け入れた。これは私の過去の芸術形象の孤立絶縁、道徳政治の実用に関係しないなどの頹廢主義の美学思想体系を覆した。」<sup>(52)</sup> これによって二つの問題を討論することができよう。第一に朱の観点はどのようなタイプのマルクス主義に属するのだろうか。第二に「旧観点」に対する「新しい解釈」はどの程度美学を開拓したのだろうか。

第一の問題について言えば、朱はマルクス主義に対して確かに自分なりの発見をしていた。マルクス主義からはじめたとき、朱にはすでに挑戦的な心理があった。「当時私の論敵であり、現在私のよき友人である、ある同志は、わたしが答弁においてマルクスレーニン主義から学ぶという決心を表明したとき、公に宣言した。「朱なにかは、マルクスレーニン主義を学ぶ資格がない。」これはわたしの自尊心を刺激し、ひそかに彼に対して「わたしがいかに学ぶか見ていただきたい。」<sup>(53)</sup>と答えていた。学習の過程で朱はとりわけ經典の「原義」と様々な解釈の相違に注意を払い、中訳本に「殆ど全頁問題がある」ことを発見したばかりでなく、しばしばロシア訳本とソ連の学者との間の理解の偏差にも気がついた。さらに重要なのは彼があえてマルクス・エンゲルスの権威を借りて、レーニンを批判したことである。それが明確なのは反映論への批判である。本来、反映論はレーニン哲学であり、マルクス・レーニン主義の基本原則であり、スターリン主義の誤導と考えられている。<sup>(54)</sup>『唯物主義と経験主義批判』という著作ではレーニンは基本的にプレハーノフ式の形而上学唯物主義者であり、彼は「反映」を人の感覚の外物に対する「複写」「撮影」と解釈し、本のどこにも「実践」(Praxis)ということばを使っていない。しかしレーニンにはもうひとつの反映論があり、それはヘーゲルと融合した『哲学ノート』で、その中では人の頭脳はすでに受け身の受容者、一枚の写真から事実を感知する積極的な解釈者になっている。「人の意識は客観世界の反映にとどまらず、客観世界を創造する。」<sup>(55)</sup> 美学討論において少なからぬ人が苦境を見出し、まさに李沢厚が言うように、「美感を反映と言うなら多くの人は異論があろう。多くの人は哲学的認識論の公式を不適切に美学問題に、美と美感の関係に適用したと考えるだろう。」<sup>(56)</sup> しかし1957年においては朱だけがレーニン主義の内的相違を読み取っていた。<sup>(57)</sup> 暗に含意のある批評を行っている。マルクスの実践観点を発見したあと、朱は常に直観的な観点と実践的な観点を対比していた。「前者は単純な認

識活動で美学問題を見ており、後者は認識と実践の統一、実践を基礎とする原則から問題を見ていた。<sup>(58)</sup> 反映論は認識論として当然「直観的観点」に属する。朱が「直観的観点」を非マルクス主義観点として理解したとき、彼が『唯物主義と経験批判主義』でレーニンに対して行った批評はかなり厳しいものだった。もし直観的観点が消費者の観点であり、実践の観点が生産者の観点であるなら、レーニンの反映論の政治的本質を疑わざるをえない。

朱の解釈手法は相当に熟練していた。その前期は経典を信ぜず、師に盲従せず、カント、クローチェその他のいかなる巨匠の観点を問わず、彼は自己の体験と文芸実践に照準を合わせ、構造を調整し意義を拡大し、その主要な著作は全て各家の説を融合して「不足を補正する」よう折衷、調和して完成したものである。後期にマルクス主義の美学を解釈するに当たり、彼は実際は反映論であったが、イデオロギーと実践論の間の「不足を補正し」折衷、調和した。早くも1957年には彼はすでに再び反映論で美学を論じることは無かったが、文章の中ではいつも反映論、イデオロギー論、実践論をとにも取り込み、「文革」以前に彼が批評したのはすべて美学家たちの反映論に対する「誤用」であった。たとえば『美学中の唯物主義と唯心主義の争い』この重要な文章の中で最初から述べているように「マルクス・レーニン主義の文芸理論と美学とはその出発点を同じくしていた。それはすなわち反映論である。文芸は現実の反映である。」<sup>(59)</sup> その後反映論の枠組みのもとで認識と実践を補い、主観と客観の「対立物の統一」の関係を補充した。これは当然思想禁錮の時代における反主流的観点の言説戦略である。しかし長期にわたり「三論」が絡みあう中で、ついには恒常的な概念の混乱を惹起する。例えば認識論の「主観意識」を「イデオロギー」と同等に置く。すでに反映論の立場から「存在は意識を決定する。」ということ承認しながら、またイデオロギー論を以て「意識が存在に影響する」ということを強調する。しかるのちそれらの解釈を二つの並列あるいは継続の段階とする。すでに実践の観点を形成していたとしても朱はなおも反映論を放棄していない。さらには反映論によって実践論を包括している。例えば「反映の芸術観点は実践と認識の結合であり、客観と主観の弁証法の統一である。」<sup>(60)</sup> 李沢厚は当時すでに注目していたのだ。「主観」という概念のもと、二種類の厳密に区別すべきものが混同されている。すなわち人の意識（認識）と実践である。社会意識と社会的存在も混同されている。」事実上、芸術実践を以って生産実践を併呑し、精神生産（労働）を以って物質生産（労働）を併呑しており、依然として唯心主義である。<sup>(61)</sup> このような誤解が生じた原因は、朱の「誤読」にあり、また反映論の制約もあった。のちに「文革」後の思想解放時代に、朱はようやく反映論の制約を決然と乗り越えるのである。

これもまた朱の後期美学への批判に転ずる。朱が公に前期の結論の部分的堅持を表明していたとしても、重要なのは彼と前期との関連ではなく、前期との相違にあり、これは

すなわち唯物主義が確実に「主観と客観の統一」における客観性を強め、その主観性もまた前期個性の「情趣」がマルクス主義の「世界観」「イデオロギー」に転換することで、主観と客観の統一もまた前期の感情的な「物我交流」が後期の生産「実践」に転ずるのである。言うなれば、主体と客体の対立統一の枠組みの中で、審美と文芸に対する最善の理解はやはり主観と客観の統一であり、それはいかなる客観論と比べても、文芸の主観的創造の特性をよく理解していた。しかしながら、わずかに美が客観と主観の統一であることを論証するのみで、審美と文芸に対する理解を一層促しているわけではない。朱は1958年に蘇軾の詩から引用して、「若し琴上に琴声有りと言はば、放ちて匣中に在るに何ぞ鳴らざる。若し声指頭の上に在りと言はば、何ぞ君の指上より聞こえざる。」朱は自分は蘇軾と同じく、琴の音を主観（指先）と客観（琴）の統一の産物と認識している。蘇軾に早くからこのような論があった上には、朱が後半生において心血を注いだ主観と客観の統一論は単なる常識の再演ではなかっただろうか？ 事実、実践論を受容して以後、朱の理論著作は主に労働実践を説き、審美的実践と生産的実践の相違を区別することは殆ど無い。主に審美がいかにして労働実践の過程で生成発展するかを述べており、審美と文芸の内部に分け入ることは少ない。カント以来、美学の主題はすでに「美とは何か」という存在論の問題ではなく、いかに美を認識するかという心理学的問題になっている。20世紀以降、美学の主題はさらに「芸術とは何か」という根本を批評する問題に置き換えられ、朱ですら前期の「文芸心理学」から「美とは何か」という「プラトン主義」に後退しており、彼の博学と奮闘を以てしても、美学の最前線に切り込むことはできなかったのである。1979年に朱は手紙で述べている。「私が美学を研究したのは主に解放前のことである。質の面から見ても、量の面から見ても解放前の著作が比較的重要である。」<sup>(62)</sup> これは遺憾に思われることである。

当然、これは朱の前期の審美と芸術を論題とする大量かつ精緻な研究との相対的な比較である。いかなる客観的な観察も見い出せないとは言え、朱はマルクス主義を受容した後にもなお創造的な貢献をした数少ない学者の一人である。マルクス主義美学から言って、当時の中国にはすでに二つの伝統があり、その一つはプレハーノフらの唯物論であり、二つ目は、レーニン、毛沢東のイデオロギー論である。前者は文芸を認識論に服従させ、文芸の審美的特性を抹消した。後者は文芸を政治の道具、階級闘争のバロメーターとみなした。この二つの伝統によって敷衍された美学観念は、その実践の過程で、文芸の発展を束縛する戒律に転じた。その未だ広く公認されていないマルクス主義美学の論著の中で、朱は一貫して審美と文芸の特殊性、および創作と鑑賞における主観能動性を擁護し、50年代における「物を見て、人を見ない」美学に反対し続けた。60年代には実践論を根拠に芸術と生産労働を関連づけ、中国美学を受動的反映論の制約から脱却させた。80年代にはイデ

オロギーと上部構造の関係についての討論で学術思想に独自の問題を提起した。マルクス主義者としての総体的観点から、前期の「移情論」「内模倣」等の観点を「復活」させ、毛沢東の形象思维論を借りて、審美の特殊性などを再び提議した。これらの全てが、前述の二つの伝統をはるかに凌駕していたために、中国のマルクス主義美学は相当な理論的活力と創新の品格を具えることになり、当時の状況下で最強の学術性を具えた。そこで朱本人が言うには実践論は審美と芸術を人類の生産実践と文化発展のマクロなパノラマの下に置き、人と自然との弁証法的関係、人の歴史的实践活動における審美探索の謎についての解答など、長年彼を悩ませた主観客観統一の問題を解決するだけでなく、彼が早くから懸念していたカント・クローチェ美学の狭隘な空間から脱却させた。その後期美学の成果は審美と芸術の経験・心理に対して徹視的な「閉鎖的な」研究を行うのではなく、その歴史・実践的な関係において審美と芸術の歴史的形成と曲折的な発展を遡及し、審美とその他の人類活動の複雑な関連を詳らかにするものであった。その理想とするところは、その構想によって「ポストカント」の美学理論を構築することにあつた。事実上、20世紀美学の重要な趨勢の一つは、審美の独立、モダニティ構築のための芸術の自律が、それ自体、市場原理と自己の利益に基づくところの新興の資産階級の虚構のイデオロギーであることを認識することであった。<sup>(63)</sup> たとえ朱がこのことを詳述していないとしても、一つの枠組みを画し、重要な原則を提出し、当時の環境のもとで到達しえる最良の理論的成果を獲得し、より完成された「後期美学」を自ら擁することにあつた。

マルクス主義はひとつの総体であり、その美学観点に対する解釈はその思想全体に通底する思想全体の解釈とならざるを得ない。まさにこの一点において朱はきわめて稀有な存在として、学術と思想において中国マルクス主義の自己再生に参与することとなったのである。

#### 四、人道主義・発揚され疎外された人道主義

自由主義の基礎のひとつは人、特に個人の価値と権利の、尊重と擁護にある。40年代はじめ、朱は「極端な唯物史観は私たちを満足させることはできない。なぜならそれは多かれ少なかれ運命論であり、人の自由意志を剥奪し、人の道徳責任や努力の価値を抹消するからである。」しかし1983年には「研究を通して、私はマルクス主義がきわめて高い学術価値を持つことを発見した。それは人の主観意志を否定しないばかりでなく、人道主義を最高の理想とするからである。」<sup>(65)</sup> 前期・後期の基準は常に人道主義である。二つの異なる評価の淵源は、ひとつは朱光潜の思想認識の変遷にあり、もうひとつはマルクス『1844年経済学哲学手稿』の発見にある。もし朱の実践論が具体的な美学の問題において新しい

貢献をしていないと言うなら、彼がマルクス像を刷新したことは後期における真の貢献である。

それは人なき時代であった。暴力革命が成功したのち、個人に対する監視が日を迫って厳しくなるにつれて、人性論、人道主義は長期にわたって資産階級、修正主義のイデオロギーとして批判を受けた。まさに文芸は主観性の頑強な堡壘のようなものであり、文芸は人性論、人道主義の障壁であった。1957年、巴人は『論人情』という一文とこれ以前の『文学論稿』という書物の中で、人性は階級性より広く、文芸は人情と人性を描くべきであり、「真の人性」を回復すべきであると述べている。同年銭谷融は『論「文学是人学」』の中で文学は人を中心とすべきであり、文学は「力を尽くして真の人道主義を守るべき」であると強調している。1985年以降、何其芳は『論「阿Q」』『論「紅樓夢」』などの論著において、成功した典型人物は単に一時代、一階級の現象ではなく、人がみな共有するところの特性こそが、典型と同義であるとしている。<sup>(66)</sup>このような観点が世に出るや、それが無情な批判に晒されたとしても、つまるところ、人性、人道こそが、文芸領域において確固たる存在であることを明白に示している。

朱光潜の前期の自由主義は人性を尊重する人道主義をその特色としている。49年以降、彼があえて抑圧に耐え、苦心惨憺の末、擁護したのが主観であり、明言するわけにいかなかったのが人道主義の擁護であった。彼は後に述べている。「私は一貫して「主観客観の統一」を堅持した。おそらく5-60年代の間にそれは攻撃の目標となった。主観を軽んずることは、実は人を軽んずることであり、よって、人性論、人道主義もまた罪状となり得た。」<sup>(67)</sup>「主観」の名のもとに人性、人道を守るだけでなく、朱は時に明らかに自己の人性論を語っている。彼は1957年の『美の客観と主観の統一を論じる』において「人類普遍性」の問題を提出し「階級性と党性」は、普遍的な人性を排除するであろうか？ わたしは排除しないと考える。科学的論理から見ても多くの対象はすでに一つの類に属するのであり、この類は必ずその共通性を有するのである。——次に事実を見ても、いかなる時代の人もみな共通の理想を抱く。——マルクス主義は事実を尊重するのだから、わたしは「人情の常」を輕輕しく抹殺することなど、あり得ないと思う。」<sup>(68)</sup>60年代はじめ、階級闘争は主旋律となっていたが、朱はすでに1960年の書信のなかで同じ観点について述べている。「「普遍的な人性」を批判することについての問題は、近頃、修正主義批判の対象のひとつになっている。私に言わせれば、この問題は複雑かつ困難である。——修正主義者の誤りは「人性」の承認にあるのではなくて、階級社会における文芸の階級性を否定することにあるのだ。」<sup>(69)</sup>言うなれば、朱の60年代の人道主義に関する言論は単に理論的検討にとどまっている。1978年以降は、朱は新しい形勢のもとでこのような人性論を力強く主張し、あわせて「文官」の政治的意図に省察を加えたのである。

しかしながら、朱の後期の人道主義は主に前期思想の「焼き直し」ではなく、マルクスの『手稿』を手がかりに提出した実践論の人道主義である。人民出版社はすでに1956年に『手稿』の中国語訳を出版していた。それが晦渋で難解であるためか、あるいは流行していたマルクス主義とあまりに差異があるためか、50年代を通じて『手稿』は中国思想に取り入れられることがなかった。1957年、巴人が依拠したのはマルクス・エンゲルスの『聖家族』第四章の一節であった。銭谷融が頼みとしたのはゴリーキーで、朱光潜が利用したのはレーニンの「人民性」であり、彼らはまだ『手稿』の思想を発掘するには至らなかった。1960年になって朱はようやく青年マルクスの人道主義に対する溢れる情熱を感じ取るに至り、『生産労働と人の世界に対する芸術掌握』で、中国学术界で最初に青年マルクスの文章を真摯に検討したのである。<sup>(70)</sup>

平素とは異なり、一貫して文芸の特殊性に注目する朱光潜のこの文では文芸についてほとんど語られない。これは彼の真の意図が単にマルクス主義美学でなく、マルクス主義そのものの探索であったことを示す。文章はマルクスの『「政治経済学批判」序言』の中のこの言葉から始まる。「頭脳の中で思考内容の全体となって現われるような全体は、思考する頭脳の産物であり、その頭脳にとって唯一可能な方法で世界を自分のものにする頭脳の産物であって、その方法は芸術、宗教、実践的精神が世界を自分のものにする方法とは異なったものである。」この下りは長く、ソ連および中国において美学界の論争点となった。最も重要なのはマルクスがここで提出した幾つかの掌握方式ではないだろうか。朱の解釈はそれを科学的、実践精神的の二種類に分け、芸術的、宗教的を後者に帰納する。「この言葉の重要性は、明らかに科学的な掌握の方式と芸術的な掌握の方式を分けているのみならず、最も重要なのは明らかに芸術的掌握方式と実践精神的掌握方式の関連を指摘していることである。」<sup>(71)</sup>なぜ二種類であって四種類の掌握方式でないのか朱は論証していない。彼に言わせるならば、重要なのは芸術と科学を区別して、審美と芸術とを労働実践に取り込むことである。文章の主な内容は人類の労働について分析する原則的な問題である。労働が人類の歴史の始まりとするなら、労働はまた工具の製造から始まる。労働は自然の改造と同時に人の需要と願望を満足させ、同時に人の主観方面における豊かさ、客観世界における豊かさ等を実現した。朱は人の現実の実践掌握と芸術掌握の区別を全く等閑に付しているわけではない。しかし「それらの区別を略述」したとき、その実、朱が語ったのは労働の歴史であった。原始人の労働はすなわち芸術であり、それは資本主義の「疎外」において分離される。共産主義は芸術掌握と実践精神の掌握の統一を回復するのである。おそらく当時の人性と人道主義に対する批判の圧力に迫られて、朱はこの文中において直接的にマルクスの人道主義に論及していないが、労働、実践、疎外、人の本質的な力の対象化、自然界の人工化、人の全面的な発展など『手稿』もまたマルクス主義実践観の主要な概念



としてすべてが提出され人道主義が臨場感をもって語られている。

さらにこれらの経典を根拠に1979年3月、朱は『人性、人道主義、人情味と共通の美の問題』を発表して、明確にマルクス主義もまた人道主義であることを提唱している。マルクスの『経済学・哲学手稿』の著作全体の論述は、すべて人性論から出発し、彼は人の本質的な力量を力の限り発揮すべきことを証明し、「人の肉体と精神両面の本質的な力」が人性であることを強調した。マルクスはまさに人性論から出発して、無産階級革命の必要性と必然性を論証するとともに、人の本質をして、その力が充分自由に発展したとき、必然的に私有制が消滅することを論証した。<sup>(72)</sup>

この後、朱はまた『マルクスの「経済学・哲学手稿」中の美学問題』など多くの文章を発表して、特に『資本論』第一巻第三編第五章が論じる『労働過程』とエンゲルスの『猿が人間になるについての労働の役割』を例にとり、大成したマルクスが青年時期の人道主義思想を放棄せずそれを継続させていたことを論じている。

70年代から80年代にかけて、マルクス主義は中国において遅ればせながら「人道主義への転向」<sup>(73)</sup>を見た。先鞭をつけた者の一人として、朱は強力に人道主義を強調するばかりか、実践論的人道主義の歴史的起源を遡及し、倫理主義を超えて、ヴィーコ・ヘーゲル・マルクスの思想系譜を構築した。朱は「いくつかの基本的な哲学の観念において（例えば人性論、人道主義および創造による実践観点、人類自らが創造した人類の歴史的観点など）ヴィーコは常にマルクス主義に接近していた。」<sup>(74)</sup>と述べている。彼は体力の衰えをもとめせず、驚異的な気力で『新科学』を翻訳した。ヘーゲルについては彼は前期において熟知していたし、60年代の『西方美学史』においても章を立てて論述している。しかし70年代に『美学』を翻訳した過程で、朱はまたその中に「実践的観点の萌芽」を発見したのである。「マルクス主義以前には、ヘーゲルが実践的観点を重要な位置に置いた。」<sup>(75)</sup>「マルクス主義文芸理論の多くの観点はヘーゲルの『美学』に遡ることができる。たとえば人が労働過程において客観世界を改造すると同時に自己を肯定し、自己の実践的観点、を改造する。人の全面的発展の観点は、「外化」「疎外」の観点であり、資本主義は全面発展の観点に有益でない、典型環境と典型性格の観点など、すべてそうである。」<sup>(76)</sup> ヴィーコ・ヘーゲル・マルクスの核心は、実践的創造、自己実現、歴史発展である。そうであれば、マルクス主義は消極的、静観的な反映論ではない。階級闘争と無産階級専政を以て任じる社会科学でもない、それは生産労働を通じて、資本主義の疎外現象を克服し、人の全面的発展を実現する歴史主義であり、人道主義なのである。晩年の朱光潜はこの思索の果てに完璧な理論的成果を獲得するには至らなかった。しかしその簡潔な提示により、様々な形態のマルクス主義との比較によって、さらに深遠な歴史哲学的性質を具えたマルクス主義的人道主義の輪郭を描いて見せた。<sup>(77)</sup>

しかしながら、実践論的人道主義には自ずから限界があった。『手稿』を解釈したとき、朱は重要な発言をしている。「人道主義は西方の歴史的産物であり、時期に拠って、内容も異なるが、総じてその核心思想は、人の尊厳を尊重し、人をあらゆるものより高位に置くことである。——」<sup>(78)</sup> 彼は、人道主義は普遍的思想であると同時に特殊な内容を持ち、人道主義のスローガンは、多くの思想と関係を持つことを明確にしている。朱自身は二種類の人道主義を擁しており、その一つは前期の自由主義を基礎とする人道主義、もう一つは個人の政治的権利とは無関係の実践論的人道主義である。朱の思想と継ぎ合わせると、その共通項は普遍的人性の承認であり、人性の自由な発展が社会の理想であることの承認にある。その違いは、一つ目の人道主義が個人を主体とし、政治的自由を条件として、対立項として社会政治生活における人道の否定、非人道を問題とするのに対して、二つ目の人道主義は人類全体を主体とし、人の自然に対する認識と掌握を条件として、対立項として自然条件の限界を問題とすることにある。実践論的人道主義が個人の権利と個人の自由を内包しないがゆえに、人類のその他の種に対する優越を強調する点において、自然を改造して自我を創造すると同時に、それは容易に個人の圧迫と現実に対する苦行の称揚に転ずる。個別の個体を集団的機械のねじ釘、歴史の進歩の道具とするのである。<sup>(79)</sup>

これはまさしく同時代の政治文化について言っているのである。マルクス主義の思想史上、毛沢東の地位は主に主観の重要性の強調にある。「たとえ毛沢東がいつマルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』を読んだかを明らかにすることが不可能であったとしても、毛沢東の『実践論』中の方案はマルクスが『フォイエルバッハに関するテーゼ』の中で到達した唯物主義と人の関与とを結合した定義に非常によく似ている。」<sup>(80)</sup> 毛沢東が書いた『実践論』は、『反映論』に言及していない。反映論に言及する時には、真に語るべきはやはり実践論である。たとえば「反映論は受動的な受容の対象ではなく、能動的なプロセスである。」<sup>(81)</sup> 「最も重要な側面は能動性である。」など。朱が「物的要因を見て、人的要因を見ない」美学を批判したとき、毛沢東もまたスターリンの「物的要因を見て、人的要因を見ない」経済学を批判していたのである。「彼は以前言っている。技術がすべてを決定すると。これは物的要因のみ見て人的要因を見ないことである。のちに彼はまた、幹部が全てを決定するという。これは幹部という人を見て、民衆という人を見ないのである。」<sup>(82)</sup> 5, 60年代において毛沢東は一面で実践論と能動性の観点から人が全てを決定することを論証し、人が最も最高の価値を付与された結論であり、「人の要因を第一とする」「政治工作を第一とする」「思想工作を第一とする」「活きた思想を第一とする」という類の「精神万能」のスローガンに賛同した。もう一方で、国家を実験場となし、制約条件も客観規律も無視した意志論の実践に従事し、大躍進から「文革」にいたる人間悲劇を惹起したのである。個体の価値は極度に発揚された集団的人類の価値の中で徹底的に疎外され「為

に犠牲となりし壮志多く有りしが、敢へて日月をして新しき天に換え教む」。個人の犠牲が集団の偉業となり、人の頌歌はまさに犠牲の儀式となる。文芸上、反映論、リアリズムはもとより宣伝され正統とされた。しかし毛沢東の文芸政策の核心は政治と階級闘争に奉仕することであり、よって不断に「真実を描く」論を批判し、リアリズムを批判し、当代文芸は長期にわたって絵空事を内容とし、欺瞞と騙りを効能として、社会人生の現実が文芸に反映されることはほとんど無かった。餓死者が野辺に満ちて、「人が相食らう」60年代はじめに至って、そこに響き渡る文芸の主旋律は依然として、歓びの頌歌であり、光明曲であった。<sup>(83)</sup> 当然のことながら、朱の実践論は毛沢東が階級闘争を以て主とした「大衆運動」ではなかった。能動性は盲目的心服と詩化されたロマンではなかった。彼のイデオロギー論は階級闘争に服従するものではなかった。今ここで、毛沢東が朱の文章を読んだか批評したかどうかかわからないが、朱の主観能動性に対する強調、実践と人の価値に対する顕影などは、確かに似通っている。朱は明晰に語っている。「わたしは「意識活動」、世界観、階級意識、生活経験等の芸術に及ぼす影響についての否定を見ることはできない。この社会イデオロギーはどのように芸術作品の中に入り込むのだろうか。」<sup>(84)</sup> 1982年に共産党が「文芸は政治に従属する」というスローガンを取り下げたとき、朱はある座談会で述べている。政治的基準の強調は偏向を免れ得ない。しかし「階級闘争を廃止するなら、政治的基準も不問となるのだろうか。ある人は「政治」という言葉さえあえて使わない。このような現象は警戒すべきである。」これが朱の「保守」であるということとは出来ない。なぜなら彼は、経済上は生産責任制と資産階級制度の遺物である商品流通とを同時に行うことを認めていると同時に「ブルジョワ自由化」については時期尚早としてこれを否定しているのである。<sup>(85)</sup> その原因は彼が「政治」によってのみ主観能動性、イデオロギー論、実践論を擁護し得るためである。よって、朱の反映論に対する批評や、人の能動性や人道理想の強調などは、当時の主流哲学の言説と真正面から衝突するにもかかわらず、当時の政治文化全体とは、とりわけその政治文化の創造者である毛沢東の思想とは対立するものでなかったのである。それは言い換えれば、朱の解釈は經典の「原義」の部分をサポートするのみならず、その環境とも折り合いをつけるものと言えよう。

朱はこの二種類の人道主義の区別をはっきり自覚していなかったもので、彼はマルクス主義の背景の中にしっかり取り込まれていた。「マルクスの言葉を用いれば、共産主義とは「人があらゆる方式を用い、よって一人の完全な人となり、その全面的な本質を掌管する。」これは即ちマルクスが常に強調していた全き人の観点であり、物質的財産の創造も、精神的財産の創造も（文芸もそこに含めて）一律に適用されるのである。<sup>(86)</sup> ここにおいて、理想の境地から言って、実践論的人道主義と朱の前期における人の全面的発展の思想は完全に一致するのである。朱本人がその間の矛盾を感じないばかりか、実践論的人道主義は畢

竟、マルクス主義の西方人文伝統の部分的関連を明示しており、無産階級革命が労働者を苦しみ境遇から救う、という見方も社会主義の人性の面目を示している。欧米では1930年代から、東欧とソ連では50年代から『手稿』などマルクスの早期の著作に対する、マルクス主義の伝統における実践、人道主義、疎外などの問題に対する、多くの探索が始まっており、経済唯物主義を中心とする第二国際の科学的マルクス主義、極権体制が合法化され硬直化したマルクス主義とは異なるマルクス主義を塑像し、世界的な社会的改革に基礎を提供した。朱がどの程度外来の影響を受けていたのか正確に見積もることは難しい。60年代初めには、『哲学訳叢』と『学術資料』（中国社会科学院哲学研究所『学術資料』研究室編）には『手稿』と青年マルクスに関する文章を発表している。朱の60年代の文章は「近年のソ連美学家たちの叙述を結合して」書いたものであり、1978年にはまた「この40年来、全世界が常に論争してきた「疎外」問題は、マルクスの『経済学・哲学手稿』の特に「疎外労働」の章に詳述されている。」<sup>(87)</sup> 世界的に見れば朱の観点は何ら斬新ではなく、疎外と社会主義を関連づけてもいない。しかし中国においては朱は東風の第一陣であり、彼がその輪郭を描いたヴィーコ・ヘーゲル・マルクスの思想路線は歴史主義において突出しており、李沢厚が再び主体性を昇格させたヴィーコ・シラー・マルクスの伝統と相対し、美学をして20世紀末の中国マルクス主義をさらに進展させる潜在的な基点とした。

朱光潜のような学者は、本来当代の思想について創造性を発揮することはない。人道主義思潮が沸きあがった80年代には、彼はすでに意気消沈した晩年であったために、かつて前期の時のような、学術、思想、政治に完成された思想系統を提出することはなかった。また李沢厚のように実践論美学からはじめて「実践論主体性哲学」を展開することもなかったが、ただ同時代の人と比べて、朱は歴史的環境が許容する可能性を最大限に利用して、巧妙に学術と思想の間隙で、部分を全体に還元する解釈学循環の方式でマルクス主義美学とマルクス主義に対してその現代化を推し進めたのである。

## 五、余論

美学界が常に提起した問題は、朱光潜の後期の「マルクス主義」がはたして「原義」の正確な理解による演繹であったのか、それともマルクス主義を借りて前期の思想を重ねて叙述していたのかということである。本稿ではその中間を取る。言い換えるなら49年以降、朱は「脱胎」していたが「換骨」していなかった。「換骨」していないというのは、彼が依然として前期美学観点と学術傾向を堅持していたことを指す。主観性と人道主義とは前期思想の要であり、彼がマルクス主義に分け入る起点でもあった。それらは、依然として朱の後期論著の主導的原則であった。「脱胎」は彼がマルクス主義の体系に入って、か

つ真摯にマルクス主義の概念と方法で前期の観点に新しい解釈を加え、前期観点の意義と効能を刷新したことを指す。もし当代の学術思想主義が一般に經典著作自身の構造と観点に基づいて理解、受容されるのなら、朱光潜在體現したものはまた別の方法であり、もともとから具わった思想と創造的手段に拠って、発展的にマルクス主義を理解し、注経式のマルクス主義学術を凌駕した。自己の観点に自覚的であればこそ、時流のマルクス主義に迎合せず、抑圧のもとで発言権を獲得するために、朱はますます第二種を第一種に向けて発展させ、50年代にマルクス主義に接したのは遅すぎたきらいもあるが、60年代以降、特にマルクス主義に親近感を抱き、また熟知した上で、マルクス主義を自任しての「反マルクス主義」的な観点への批判も頻繁に見られる。よって、朱の後期の思想は前期思想の「再建」であると理解できる。「再建とは理論を解体し、新しい形式でそれを組み立て、その理論が打ち立てた目標を首尾よく達成することである。」<sup>(88)</sup> マルクス主義は朱の概念の道具でも文飾の美辞でもなく、前期思想を矯正し、それが主観論であろうと人道主義であろうと、朱の後期思想の基礎は集団的な生産実践であった。彼はまざれもなく、自由主義からマルクス主義への転変を完成したのである。

よって朱光潜在後期の思想においてマルクス主義の問題を彼なりの論述に置換したとすれば、それはどのようなマルクス主義なのだろうか。高度な自我意識と社会的性格を具えた思想伝統として、マルクス主義が大きな時代の変遷と多くの思想の挑戦を受けてなお、驚異的な自己調整と発展の能力を保ったのは、主にそれが終始他の思想伝統と対話、論争を行い、異なる観念や理論を批判的に取り込んだためである。朱光潜在またマルクス主義以外の思想を持ち込み、彼の参与はその実践によって、マルクス主義の開放的性格の生きた証ともなっている。美学から出発した実践論的人道主義がいかに当時のイデオロギー的押印を留めていようと、また当時の状況下で異端として批判を受け続けたとしても、中国マルクス主義の発展から見て、それは49年以後唯一の意義ある収穫である。もしそれが完全な論証系統を具えていないというなら、その責任は環境にあるのだ。朱の後期思想の歷程は、いかなる苛酷な政治的圧力や、思想統制のもとでも、真の学者は何らかの創造的な仕事を為し得ることを示している。まさに朱光潜在ような稀有な学者を通して、20世紀の中国学術界は、辛くもある程度その連続性を保っているのである。

## 注釈

- (1) 荃麟, 1948年『對於当前文艺運動的意見』『中国新文学大系・1937-1949 文艺理論卷二』1990年, 上海: 上海文艺出版社。

- (2) 中共中央, 1947年『中共關於必須將革命戰爭進行到底反對劉航琛一類反對計画的指示』, 中央檔案館編:『中共中央文獻選集』第16冊(北京:中共中央党校出版社, 1922)。
- (3) 侯外廬, 1985年,『初的 pursuit』, 北京:三聯書店, 第201頁, 胡光, 1989年『自由主義運動的批判在香港』『中国現代史料選輯』第六冊「補編」1989年, 北京:中国人民大学出版社を参照のこと。
- (4) 単世聯, 1999年,『西方美学初歩』「結語」, 広州:広東人民出版社を参照のこと。
- (5) 朱光潜, 1936年,『文芸心理学』,『朱光潜全集』第1巻1987年, 合肥:安徽教育出版社, 第314頁。『朱光潜全集』20巻, 安徽教育出版社より1987-1992年連続して出版。以下の『朱光潜全集』では巻と頁のみを明記する。
- (6) 朱光潜, 1936年,『文芸心理学』『朱光潜全集』第1巻, 第360頁。
- (7) 朱光潜, 1936年,『文芸心理学』,『朱光潜全集』第1巻, 第314-315頁。
- (8) 朱光潜, 1957年,『読「在延安文芸座談会上的讲话」的一些体会』北京:『文芸報』1957年5月。
- (9) 朱光潜, 1948年,『自由主義与文芸』,『朱光潜全集』第9巻, 第479-481頁。
- (10) 朱光潜, 1936年,『文芸上的低級趣味(上):關於作品内容』,『朱光潜全集』第4巻, 第184-187頁。1942年, 国民党中宣部長張道藩が発表した『我們所需要的文芸政策』(重慶『文化先鋒』創刊号, 1942年)は直ちに自由主義の反対に遭った。梁実秋は次のように指摘している。「文芸思想は政治主張, 経済主張と釣り合いをとって打ち立てるべきであり——それは文芸の領域から離れたところに立脚して, いかんこれを管理し利用しようかとする企てなのである。」(古遠清, 2001年,『大陸去台作家沈浮録(一)——關於張道藩』, 広州:『東方文化』第5期を参照のこと)。さらに重要なのは, 張道藩がこの文を個人の名義で発表しており, 国民党と関わる公式の文芸政策ではないことで, 権力のバックアップや制度的な施政を得ることもなく, 同年発表された毛沢東の『在延安文芸座談会上的讲话』の及ぼした影響力とは大きな違いがある。単世聯, 2000年,『中国馬克思主義文芸理論:從瞿秋白到毛沢東』, 汝信主編:『美学的歴史:20世紀美学學術進程』(合肥:安徽教育出版社)を参照のこと。
- (11) 朱光潜, 1932年,『談美』,『朱光潜全集』第2巻, 第6頁。
- (12) 朱光潜, 1948年,『自由分子与民主政治』,『朱光潜全集』第9巻, 第305頁。
- (13) 朱光潜, 1948年,『国民党的改造』,『朱光潜全集』第9巻, 第518頁。
- (14) 朱光潜, 1936年,『文芸心理学』,『朱光潜全集』第5巻, 第38頁。
- (15) 蔡儀, 1948年,『論朱光潜』,『蔡儀美学論著』上, 1982年, 上海:上海文芸出版社。
- (16) 郭沫若, 1948年,『斥反動文芸』,『中国新文学大系・1937-1949, 文学理論卷二』1990年, 上海:上海文芸出版社。郭はこれ以前に朱の数百万字に及ぶ著述を一字も読んでいない。「この文章を書くために, 友人たちが二冊の『文芸報』を探し出してくれ, わたしは彼の『観劇与演劇——兩種人性理想』を拜読できた。」
- (17) 荃麟, 1948年『朱光潜的怯懦与凶残』,『中国新文学大系・1937-1949, 文学理論卷二』, 1990年, 上海:上海文芸出版社。1948年, 中国共産党の画策のもと, 北京の学生運動は澎湃と沸き起り, 朱光潜は『談群衆培養怯懦与凶残』という一文で述べている。:群衆運動は個体をその非現実的な群衆の中に押し込み, 自らは責任を負わない。よって個体を法律, 道徳的な拘束から解き放ち, 縦横劣悪な「自由」を招く。群衆の庇護のもとで個体はその状況に応じてあからさまに出来ないような残酷な野蛮さを露呈する。「社会の団結はこれまでいつも相愛に基づいてきた。今や群衆は怨恨を借りて連帯を強め, 誰もが怨恨に浸り, 怨恨を晴らし, 礼賛することに酔いしれている。この怨恨はついに社会を焼き尽くし, ついに怨恨者自身をも焼き滅ぼすであろう。」彼はよって「この潮流に巻き込まれた人々が早く目を覚ますことを心から願っている。」(『朱光潜全集』第9巻第357頁) この文を厳しく批判し「怨

## 1949年以後の朱光潜—自由主義からマルクス主義美学へ—

恨を礼賛した邵荃麟は「文革」の群衆運動の渦中で自ら死すことによって朱の観点を実証したのである。

- (18) 朱光潜の出国の状況に関連して、蒯大甲、2001年、『朱光潜後期美学思想述評』（上海：上海社会科学院出版社、第3-4頁）。
- (19) 朱光潜、1974年、『新春寄語台湾的朋友們』、『朱光潜全集』第10巻、第423頁。
- (20) 錢念孫、1955年『朱光潜与中西文化』、合肥：安徽教育出版社、第411頁。
- (21) 三回にわたる運動の詳細な情況については、鳳政、2000年、『改造』、鄭州：河南人民出版社。
- (22) 毛沢東1950年、『關於組織民主人士參觀或參加土改鎮反工作』、『毛沢東文集』第六巻、1999年、北京：人民出版社。
- (23) 常風：1995年、『回憶朱光潜先生』、『逝水集』、1995年、沈陽：遼寧教育出版社、第88頁。
- (24) 朱虹：1955年、『我的老師朱光潜先生』、『朱光潜紀念集』、1995年、合肥：安徽教育出版社。
- (25) (26) 常風：1955年、『回憶朱光潜先生』、『逝水集』（同上）、第89頁。
- (27) 蒋孔陽：1980年、『建国以後我国關於美学問題的討論』、『美学』第2輯、1980年、上海：上海文艺出版社。
- (28) 張隆溪、1955年、『探求美而完善的精神』、『朱光潜紀念集』、同上。
- (29) 朱光潜：1980年、『作者自伝』、『朱光潜全集』第一巻、第7頁。指導者の「呼びかけ」があったとはいえ、厳しい批判は依然続いていた。1958年「北京大学中文系二年級魯迅文学社」は「朱光潜——反動統治者麾下の一員戦將」を題として朱の49年以前の二冊の本を批判した。「形式は変わっても本質は変わらない」として朱の1956年以降の論著を批判した。「朱先生は過去の誤りについて全て騙されたと言っている。その騙されたという上着を脱ぎ捨て、マルクス主義に装いを改めたため、朱先生の美学思想の面目はすぐれて現実主義を具えたものと見られる。多くの読者のうちに解毒作用をもたらすと同時に朱先生に厳しい反省を促し、早くに反動的唯心主義の泥沼から離脱させたのである。」(両文はいずれも『文学研究批判専刊』第4輯、1958年、北京：人民文学出版社) 過激派学生は「組織上」の政策を代表するものではなく、この二つの文は朱が教鞭を取った北京大学の学生が執筆し、権威ある出版社が出版したものであり、その圧力は甚大であった。
- (30) 賀麟『朱光潜文艺思想的哲学根源』の一文を例に挙げる。この文はもと1956年2月『文芸報』が組織した座談会上的発言原稿であり「書き上げたあと、わたしは特に蔡儀と馮至同志に初稿を提出して貴重な意見を求めていた。書き改めたあとすぐに『文芸報』雑誌に送って発表した。最後にこの文は胡喬木同志の意見により、あらためて『人民日報』に発表された。」(『賀麟哲学和哲学史論文集』、1990年、北京：商務印書館員書館、第428-432頁)。
- (31) 錢念孫：1995年、『朱光潜与中西文化』、同上第428-432頁。
- (32) 1938年秋、四川大学が「党化教育」に反対したために学校側と摩擦を生じたので、朱はかつて彼の左派学生であった何其芳らに延安に赴く考えを示し、周揚が手紙で招待してきた。朱はまだ行くことが決まらないまま遠慮がちに返信している。「延安から戻った何人かの友人に私は会い、延安の事業について叙述した著作を何冊か読んで、私はそこに一縷の望みを見出したのである。」「私はあなた方の仕事に大変共感している。」(朱光潜：1982年、『致周揚』、『朱光潜全集』第9巻第19～20頁)。
- (33) 朱光潜：1950年、『關於美感問題』、『朱光潜全集』第10巻、頁5。
- (34) 蔡儀：1950年、『略論朱光潜的美学思想』、『蔡儀美学論著初編』下；黄葉眠1950年、『答朱光潜先生併論治学態度』、北京：『文芸報』第一巻第8期。
- (35) 胡風発言記録『文芸報』1954年第22期（北京：1954年12月）。

- (36) 朱光潜, 1951年, 『最近学習中の幾点検討』, 『朱光潜全集』第10巻, 第21頁。
- (37) 朱光潜, 1957年, 『從切身經驗談百家争鳴』, 『朱光潜全集』第10巻, 第80頁。
- (38) 朱光潜, 1961年, 『美学中唯物主義与唯心主義之爭』, 『朱光潜全集』第10巻, 第21頁。
- (39) 朱光潜, 1948年, 『世界的出路一也就是中国的出路』, 『朱光潜全集』第9巻, 第525頁。
- (40) 朱光潜, 1936年, 『文芸心理学』, 『朱光潜全集』第1巻, 第197頁。
- (41) 朱光潜, 1957年, 『從切身經驗談百家争鳴』, 『朱光潜全集』第10巻, 第80頁。
- (42) 朱光潜, 1956年, 『我的文芸思想的反動性』, 『朱光潜全集』第5巻, 頁27-28。
- (43) 50年代中期の反映論の権威が闡述している。艾思奇1957年, 『弁証唯物主義講授提綱』第五章, 北京: 人民出版社を参照。
- (44) 約翰・霍夫曼, 1975年, 『実践派理論与馬克思主義』, 北京: 社会科学出版社, 1988年, 25頁。
- (45) 朱光潜, 1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第71頁。
- (46) 朱光潜, 1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第66頁。
- (47) 朱光潜, 1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第69頁。
- (48) 朱光潜, 1980年, 『对「馬克思恩格斯論文学和艺术」編訳の意見』, 『朱光潜全集』第10巻, 第500頁。
- (49) 錢念孫, 1995年, 『朱光潜与中西文化』, 同上, 第515頁。
- (50) 李沢厚, 1962年, 『美学三題議』, 『美学論集』, 上海: 上海文芸出版社, 1980年, 第167頁。
- (51) 朱光潜, 1961年, 『美学中唯物主義与唯心主義之爭』, 『朱光潜全集』第10巻, 第299頁。
- (52) 朱光潜, 1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第96頁。
- (53) 朱光潜, 1981年, 『我学美学的經歷和一点教訓』, 『朱光潜全集』第10巻, 第571頁。
- (54) 諾曼・萊文, 『弁証法的内部對話』(昆明: 雲南人民出版社, 1997年) 第五章。
- (55) 列寧, 『哲学筆記』, 北京人民出版社, 1974年, 第228頁。
- (56) 李沢厚, 1957年, 『關於当前美学問題的統一』, 『美学論集』(同上) 第75頁。
- (57) 朱光潜1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第66頁。
- (58) 朱光潜, 1961年, 『美学中唯物主義与唯心主義之爭』, 『朱光潜全集』第10巻, 第302頁。
- (59) 朱光潜, 1961年, 『美学中唯物主義与唯心主義之爭』, 『朱光潜全集』第10巻, 第289頁。
- (60) 朱光潜, 1963年, 『表現主義与反映論兩種芸術観的基本分岐』, 『朱光潜全集』第10巻, 第401頁。
- (61) 李沢厚, 1962年, 『美学三題議』, 『美学論集』(同上), 第153頁。
- (62) 朱光潜, 1979年, 『致陳望衡』『朱光潜全集』第10巻, 第461頁。单世聯, 1998年, 『朱光潜与德国美学』, 『學術思想評論』第四輯(沈陽: 遼寧大学出版社)を参照のこと。
- (63) この方面について論著は非常に多い。主に伊格樂頓: 『美学意識形態』(広西師範大学出版社, 1997) 比格樂: 『先鋒派理論(商務印書館, 2002)』を参照のこと。
- (64) 朱光潜, 1942年, 『個人本位与社会本位の倫理観』, 『朱光潜全集』第4巻, 第38-39頁。
- (65) 朱光潜, 1983年, 『答案香港中文大学校刊編者の訪問』, 『朱光潜全集』第4巻, 第38-39頁。
- (66) 巴人, 『論人情』(天津: 『新港』1957年第1期); 巴人, 『文学論稿』(上海: 新文芸出版社, 1956年初版, 1959年再版) 第二編。錢谷融, 『論「文学是人学」』(上海: 『文芸月刊』, 1957年第五期)。何其芳, 『論阿Q』(北京: 『人民出版社』1956年10月16日) 『論「紅樓夢」』(北京: 人民文学出版社, 1958年) 『論文学芸術の春天』(北京: 人民文学出版社, 1964) 「序」。
- (67) 朱光潜, 1982年, 『維柯的「新科学」及其对中西美学的影響』第5巻, 第93頁。
- (68) 朱光潜, 1957年, 『論美は客観与主観的統一』, 『朱光潜全集』第5巻, 第93頁。



## 1949年以後の朱光潜—自由主義からマルクス主義美学へ—

- (69) 朱光潜, 1960年, 『致滕万林』, 『朱光潜全集』第10巻, 第187頁。
- (70) 20世紀の70年代より『手稿』の中国における地位は日増しに高まっていた。李沢厚は彼が1956年に書いた文章について「恐らく最も早くマルクスの『経済学—哲学』手稿について言及し, そこに醸成する本質の検討を企図したものである。」(1979年, 『「論美感, 美和芸術」補記』, 『美学論集』第51頁)しかし蔡儀は1944年に出版した『新美学』の第二章第五節の中で『手稿』の文句を引用している。事実, 文芸界の『手稿』に対する決着ははっきりしないものである。周揚は1937年に『我們需要新的美学』の一文で「マルクスの『聖家族』の手稿」として『手稿』から「音楽の耳」の一部分を引用している。(『周揚文集』第一巻, 1984年, 北京:人民文学出版社, 第227頁。)40年代, 周揚選編の『馬克思主義与文芸』の第一輯「意識形態的文芸」の第五節「馬克思論芸術労働与芸術創造及芸術感受性」の中から, 再び『「聖家族」預備材料』の名を借りて『手稿』の「音楽の耳」を選び編纂しており, 『哲学経済学手稿』の名義で「美的規律」に関する部分を選び所収している。『馬克思主義与文芸』は毛沢東の宣揚を得て, 中国の文芸界では甚大な影響力を持っていた。それゆえ, わずかに一文の引用を以って先見の明があるとは言えまい。重要なのは, 朱光潜だけが1960年にまさに対象に分け入ってマルクス主義の人道主義思想について論じていることである。
- (71) 朱光潜, 1960年, 『生産労働与人对世界的芸術掌握』, 『朱光潜全集』第10巻, 第191頁。
- (72) 朱光潜, 1979年, 『關於人性, 人道主義, 人情味和共同美問題』, 『朱光潜全集』第5巻, 第389頁。
- (73) 朱光潜『關於人性, 人道主義, 人情和共同美問題』を『文芸報』1979年第三期に発表。同年王若水は『關於異化概念』の一文を『外国哲学史研究集刊』第一期に発表;翌年, 王若水は『人は馬克思主義的出发点』(人民出版社より1981年出版の同名文集に所収)の一文を起草する。汝信は『人道主義就是修正主義嗎?』の一文を8月15日『人民日報』に発表する。これにより, 人道主義思潮は中国を席卷する。
- (74) 朱光潜1982年, 『維柯的「新科学」及其对中西美学的影響』, 『朱光潜全集』第10巻, 第718頁。
- (75) 朱光潜, 1979年, 『黑格爾的「美学」訳後記』, 『朱光潜全集』第5巻, 第369頁。
- (76) 朱光潜, 1979年, 『西方美学史』, 『朱光潜全集』第7巻, 第391頁。
- (77) これと対応して, 朱光潜は二度にわたり歴史主義の「開祖」であるドイツの哲学者ヘルダーを研究すべきであると述べている。(1983年, 『致郑涌』, 『朱光潜全集』第十巻, 頁637)。
- (78) 朱光潜, 1979年, 『關於人性, 人道主義, 人情味和共同美問題』, 『朱光潜全集』第5巻, 第390頁。
- (79) ナチスの強制収容所の門には「労働は自由に通ずる」という標語が高々と掲げられている。单世聯の『地獄之門の勇氣』(広州:『南方周末』2001年9月13日)を参照のこと。実践論の論者である李沢厚は人道主義を以ってマルクス主義を解釈することに賛成していない。(李沢厚, 1987年『現代思想史論』, 北京:東方出版社, 第200-201頁7を参照のこと。)
- (80) 諾曼・萊文, 1984年, 『弁証法的内部対話』(同上)第470頁。
- (81) 毛沢東 1998年, 『毛沢東哲学批判注集』, 北京:中央文献出版社, 第15, 311頁。
- (82) 鄧力群1998年, 『毛沢東読社会主義政治経済学批判和談話』上(北京:中華人民共和国国史学会印), 第70頁。
- (83) 長期にわたり唯物論的反映で美学を研究してきた蔡儀は事実上当局の承認を得られなかった。それどころか50年代から80年代にわたり周揚は彼に対して不満と困惑を抱いていた。銭中文『深切的懷念』, 毛崇傑『有人信高潔』(楊漢池, 王善忠等著:『蔡儀紀念文集』, 1998年, 北京:中央編訳出版社)等の文, および蔡儀夫人喬象鐘の著作『蔡儀伝』(2002年, 北京:文化芸術出版社)等を参照のこと。個人的怨念のほか, その原因は当時の政治文化が堅固な唯物論を必要としていなかったことにあ

るのかも知れない。

- (84) 朱光潜, 1961年, 『美学中唯物主義与唯心主義之爭』, 『朱光潜全集』第10卷, 頁299。
- (85) 朱光潜: 1982年, 『懷感激心情重溫「講話」』。この文は当時発表されなかった。商金林『朱光潜与中国現代文学』(合肥: 安徽教育出版社, 1995)ではじめて「付録」の形で公開された。
- (86) 朱光潜, 1980年, 『馬克思的「經濟学哲学手稿」中的美学問題』, 『朱光潜全集』第5卷, 第425頁。
- (87) 朱光潜, 1980年, 『馬克思的「經濟学哲学手稿」中的美学問題』, 『朱光潜全集』第5卷, 第412頁。
- (88) 哈貝馬斯 1976年, 『重建歷史唯物主義』, (北京: 社会科学文献出版社, 2000) 第3頁。

---

原題 单世聯「1949年後の朱光潜: 從自由主義到馬克思主義」(成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書『現代中国的制度与文化』“Institution and Culture in Modern China” 香港社会科学出版社・2004年3月 p 382-436 中国語より訳出)